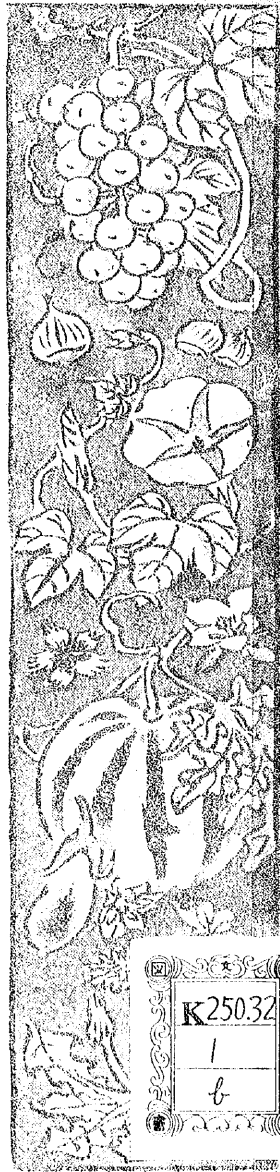


文部省著作教科書



K250.32
1
b

くいのあゆみ

文部省

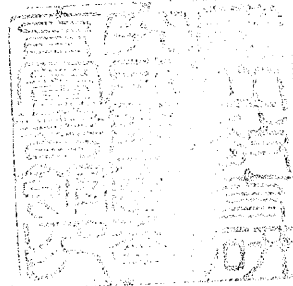
K250.32

1b

くにのあゆみ

文部省

文部省
印刷局
印刷



もくろく

第一 日本のあけぼの

- 一 歴史のはじめ
- 二 大和の朝廷
- 三 大陸文化のうけ入れ
- 四 開け行く日本

第二 平安京の時代

- 一 平安の都
- 二 藤原氏の榮え
- 三 はなやかな文化

第四 武家政治

- 一 鎌倉幕府
- 二 社會と文化
- 三 鎌倉がら室町へ

第五 鎌倉がら室町へ

- 一 建武のまつりごと
- 二 室町幕府
- 三 經濟と文化
- 四 新しい時代への動き

第六 安土と桃山

- 一 國內の統一
- 二 外交と文化

四 地方のありさま

五 武士のおこり

一八

一九

二〇

二一

二二

二三

二四

二五

二六

二七

二八

二九

三〇

三一

三二

三三

三四

三五

三六

三七

三八

第七 江戸幕府……………四六

- 一 江戸の城……………四六
- 二 朱印船……………四八
- 三 鎖国……………五一

第八 江戸と大阪……………五五

- 一 農村と町……………五五
- 二 元祿のころ……………五七
- 三 學問の道……………六〇

第九 幕府の衰亡……………六六

- 一 世界の動き……………六六
- 二 町人の力……………六八
- 三 開国……………七〇

第十 明治の維新……………七五

- 一 新政の成り立ち……………七五
- 二 新しい社會へ……………七七
- 三 文化の動き……………七九
- 四 立憲の政治……………八〇

第十一 世界と日本……………八四

- 一 明治の外交……………八四
- 二 東洋のもつれ……………八五
- 三 産業の發達……………八八
- 四 明治の文化……………八九

第十二 大正から昭和へ……………九一

- 一 歐洲大戰と日本……………九一
- 二 太平洋戦争……………九三

第一 日本のおけいばの

一 歴史のはじめ

アジア大陸の東の海に、北から南へかけて細長くつらなる島島、これが私たちの住んでゐる日本です。暑さ寒さもあまりきびしくなく、ほどよく雨がふり、草や木が生ひしげり、四季のながめも、それぞれちがつたおもむきがあります。

大昔の生活 この國土に、私たちの祖先が住みついたのは、遠い遠い昔のことでした。はつきりしたことはわかりませんが、少くとも数千年も前のことにちがひありません。世界のどこの地方でも、文化の開けなかつた大昔には、人はまだ金属くわんそくを使ふことを知らず、石で道具を作つて、用ひてゐました。かういふ時代を石器時代せきぎじだいといひます。私たちが、あたたかい南向きの

をかなどを歩いてゐると、ときに島の中に貝がらが白くちらばつてゐるのを見かけることがあります。これは、そのころの人人が、はまぐりやしじみなどを、ひろつて食べた貝がらがつもつてできたもので、これを貝塚かいづかといひます。貝塚からは貝のほかに、魚やけもの骨や、そのころの人人がふだん使つてゐた道具などがほり出されます。これらによつて、大昔の人人がどんなくらしをしてゐたかがわかります。

狩りをするのと魚をとるのが、そのころの人人のおもなくらしでした。野山に出ては木の実をあつめ、石のやじりをつけた矢を用ひ、鹿やゐのししをとつて食べ物としてゐたのです。また島國ですから、海べで貝をひろひ、鹿の角で作つたもりやつりばりを使つて、魚をとることも多かつたやうです。食べ物を入れたり、

にたぎをするのには、土のはちや、かめが使はれました。これらの土器には、大てい、なは目のもやうがついてゐます。

生活の変化 やがてこのくらじ方に、大きな変化がおこつてきました。それは海に向かふから、田をたがやして稲を植ゑる方法や、金属で道具を作るわざがつたへられたことです。私たちの祖先がまだ石器を用ひてゐたころから、おとなりの支那では、銅に錫をまぜた青銅器を使い、やがて鉄器を使ふやうになりました。これらが日本にもつたはり、金属の道具を用ひるやうになりました。青銅の剣やほこなどが作られ、また鉄の道具もできました。土器も新しいものが使はれるやうになりました。

農業のはじまり 農業がはじまつたので、生活が一段と進んできました。水田に稲を植ゑる方法がひろまると、人人は年年これをたがやして行くために、きまつた土地に住みつかなければなりません。かうして

の大事な仕事をおはじめになり、畝傍山のふもと、橿原の宮で、最初に天皇の位におつきになつた方が、神日本磐余彦天皇といはれてゐます。

大和の朝廷の勢力は、それからだいに地方にのびて行きました。出雲の國を治めてゐた勢ひのあるかしらも、大和の朝廷のもとにつくことになりました。しかし大和から遠くはなれた地方には、まだ開けてゐなかつたところが少くありませんでした。關東から奥羽の地方にかけては、蝦夷が住み、九州の南のはしには熊襲が住んでゐました。朝廷ではおひおひこれらの人も、すべて一つにするやうにつとめました。かうして、大和の朝廷を中心に、日本は一つの國をかたちづつたのであります。

氏と姓 遠い昔、多くの人人は農業にはげんでゐました。世の中が進むにつれ、農業のかたはらに、土器や玉など、手のこんだ品物を作るのを仕事とする人もあらはれました。人人の大部分は、直接朝廷に仕へた

あちらにもこちらにも、人人の集り住む村ができ、村の人人は力をあはせて、田植や取り入れにはげみしました。また力を出しあつて池やみぞをはつて水を引き、野原を開いて水田とすることにつとめました。

世の中が進むにつれて、すぐれた人が出て、多くの村をまとめてさしづをするやうになりました。かうした集りが方方にできました。中でも文化の早く開けた九州の北部や大和の地方には、勢ひのあるものがあらはれ、中には大陸に渡つて支那の文化をとり入れるものも出てきました。このやうな日本が一つの國家にまとめあげられてできたのが大和の朝廷であります。

二 大和の朝廷

國のおこり 大和は今の奈良縣にあたる地方です。緑の山山にかこまれたこぢんまりした盆地であります。そのころ最も有力なものが、この盆地からおこつて、だんだん日本を一つにまとめたのであります。こ

のではありません。地方には、それぞれ身分の高い人があつて、人民や土地を治めてゐました。この人人は同じ血すむのものがより集つて、氏をつくり、その上に立つ人が、その氏をひきゐて朝廷に仕へたのです。氏には姓といふ身分があつて、家がらの高さをあらはしました。氏の中には、朝廷に出て役目をうけもつてゐるものもあります。たとへば、蘇我氏は朝廷の藏の出し入れをうけもち、大伴氏と物部氏は朝廷をまもるのを役目としてゐました。その役目は、代代その氏でうけついで行つたのです。

古墳 世が進むにしたがつて、人がなくなると、土を高くもり上げた、りっぱな墓をつくるやうになりました。これを今、古墳といつてゐます。大てい、まゐる形をしてゐますが、大陸に見られない前方後圓の形をした小山のやうなものもあります。中でも應神天皇・仁德天皇の御陵などは、きはだつて大きなものであります。これらの古墳からは、家や人や動物の形を

した墳輪が発見され、鏡や玉や刀や、よろひ、かぶとなどもほり出されます。これらの品物を見ると、そのころの人人の生活のありさまがよくわかります。

三 大陸文化のうけ入れ

朝鮮との関係 支那は、世界のうちでも最も早く文化の開けたところの一つです。その支那に漢といふ強い國がおこり、やがて朝鮮半島の北の方にまで、勢ひをひろげてきました。これは今から二千年あまり前のことです。早くもこのころから、九州の北の方の人人は、半島に渡つて、その進んだ文化をとり入れることにつとめてゐたのです。そのうち半島の南の方に、百濟と新羅の二國ができ、また長く漢の勢ひがおよんでゐた北の方には、高句麗がおこつてきました。大和の朝廷は、國內をまとめたのち、半島の南のはしにある任那と手をにぎつて、とくにしたい間がらとなりました。やがて任那が新羅や高句麗におびやかされた

とき、兵を送つてこれをたすけました。それからのちかへつて半島の國國と、一そう深い交はりを結ぶことになりました。

漢字と儒教 かうしてわが國と半島との交はりが深くなりましたので、半島や支那本土から大陸の文化が盛んにはいつてきました。應神天皇・仁德天皇の代から、ことにそれが目だつてきました。漢字がつたはつたのも、孔子の説いた儒教の教への知られるやうになつたのもこのころのことです。大陸や半島からたくさんの人々が渡つてきて、わが國に住みつくやうになり、それにつれて、養蚕・織・裁縫・鍛冶などの、進んだわざもつたはりました。朝廷は、これらの人人をこころよく迎へ、はたらきのある人には、重い役目や高い身分をあたへて、十分にうでをふるはせました。このやうに、いろいろ新しい文化をうけ入れましたので、生活は日を追うて進み、人人の心はしだいに高められて行きました。

佛教 半島の國國の中では、任那のほかに百濟がわ

が國と最もしたしくしてゐました。支那の文化も百濟を通つてくるが多かつたのですが、ことに大せつなのは佛教をつたへたことであります。佛教はインドの釋迦が説いた教へで、支那にひろまり、半島につたはり、さらに百濟からわが國に渡つてきたのです。それは今からおよそ千四百年ほど前のことであります。

二 貝塚とはどんなものですか。近くに貝塚があつたら見に行きませう。

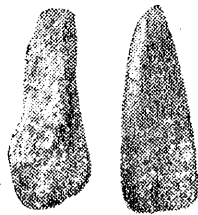
三 九州の北部や大和の地方が、とくに早くから開けたわけを考へてみませう。

四 古墳とはどんなものですか。古墳からほり出される物について、そのころの人人の生活を考へてみませう。

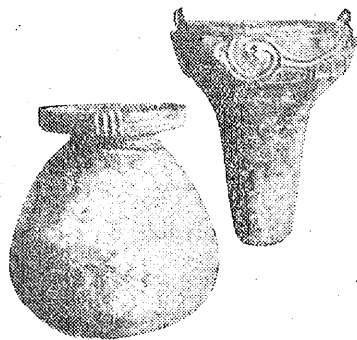
五 大陸の文化はどうしてつたはることになつたのですか。また大陸からはどんな文化がつたはり、わが國ではそれをどんなふうにとり入れたかをしらべてみませう。

問題

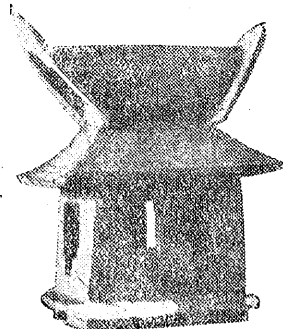
一 大昔の人人はどんなくらしをしてゐたでせうか。またそれは何によつて知ることができますか。



石をの



土器



家の輪

第二開け行く日本

一 聖德太子

わが國は大陸の文化をとり入れながら、だんだん開けて行きましたが、聖德太子のころから、にはかに進んできました。

冠位と憲法 聖德太子は、推古天皇が位におつきになつたとき、皇太子におたちになり、同時に攝政として、政治をおとりになることになりました。それは今から、およそ千三百五十年ばかり前のことであります。

太子は、攝政の間にいろいろな仕事をなさいましたが、その第一は政治をたてなほすことであります。そのころ朝廷に仕へる氏の中でも、蘇我氏のやうに勢ひのあるものが、土地と人民をたくさん持つて、力をふひとりぎめにせず、大勢の人と相談した上でやらなければならぬことなど、政治をする上の心得が、こまごまと示されてゐます。

隋との交はり そのころ、大陸では隋が久しくみだれてゐた支那を一つにまとめ、大そう榮えてゐました。太子はこれと國の交はりを開いて、その進んだ文化をとり入れ、わが國をもつとよい國にしようとお考へになり、小野妹子らを隋におつかはしになりました。その時の手紙の書き出しには「東の方の天子が、この手紙を西の方の天子にさしあげます。」と、しるされてゐました。それまでは、わが國から、支那にみつぎものを、持つて行くといふことになつてゐましたが、この時から、對等のつきあひが開かれたのであります。

太子はそののちも、使ひのものと一しよに留學生や僧をお送りになり、支那の制度や學問について勉強をおさせになりました。この人人が、うちに大化の改新

るつてゐました。また朝鮮半島では、新羅が強くなつて、わが國となじみの深い任那をほろぼし、百濟を攻めるなど、國の内も外も、大分やうすが、変つてきました。太子は、これらのやうすをごらんになつて、まづ家からで役目をうけつぐ昔からのならはしを、改めたいとお考へになり、はたらきのある人を重く用ひるために冠位をお定めになりました。つぎに十七條の憲法をつくつて、役人たちをおさとしになりました。そのはじめに「和」の大せつなことをお説きになつてゐます。これは朝廷に仕へる人人が、仲よく力をあはせなければならぬことを示されたのです。また勢ひのある人人が、人民から勝手に税をとりたててはならないこと、人民のうつたへをよく聞いて、えこひいきのない政治をしなければならないこと、大せつなことをなしとげる上に、大きなはたらきをすることになるのです。

法隆寺 太子は、またあつく佛教をたつとばれ、これを國內にひろめるために、力をおつくしになりました。ご自分で佛教の書物までもお書きになりました。たくさんさんの寺をお建てになつたりしました。そのために學問や美術も大そう進歩しました。

今、奈良の西南斑鳩の里に、なだらかな山をうしろにして立つてゐる法隆寺は、太子がおすまひの宮殿のかたはらにお建てになつた寺であります。ふつくらした丸柱の中門、どつしりかまへた金堂、大空にそびえる五重塔が、白い砂の上に、とりどりの形を見せてゐます。これらの堂塔は、今のこつてゐる木造の建物としては、世界で二ばん古いものであります。金堂の中には太子がおつくらせになつた佛像などのほか、力のかもつた線と美しい色でゑがいた壁面など、古い美術品がたくさんこのつてゐます。

二 大化の改新

大陸のやうす かうしてゐる間に、支那では隋がはろびて唐がおこり、一そう盛んな國となりました。わが國では、ひきつづき遣唐使を送つて、唐と國の交はりをつづけてゐましたので、そのやうすはすぐにつたへられました。これを見聞きした人人の間には、わが國も、唐の政治のしくみなどを見ならつて、國の中をととのへなければならぬといふ考へがおこつてきました。これを實行しようとはだてられたのが、中大兄皇子です。

皇子は、中臣鎌足らとご相談の上、そのころ大きな勢ひをふるつてゐた、蘇我氏のかしらをほろぼし、新しい政治を行はれることになつたのであります。

改新の政治 まづ孝徳天皇が、位におつきになりました。中大兄皇子が皇太子となられ、鎌足や、支那に勉強に行つて、帰つてきた人人などを、重くお用ひに

て、百濟をほろぼしましたので、百濟は、わが國にたすけを求めてきました。わが國は、兵を出して、百濟をもう一度もりたてようとしたが、唐の勢ひが強くて、うまく行きませんでした。この間に、中大兄皇子が位におつきになりました。これを、天智天皇と申します。

天皇は朝鮮のことよりも、政治のたてなほしをなしとげることの方が、もつと大せつである、と考へになり、兵をお引きあげになりました。ここでわが國は、朝鮮半島からすつかり手を引くことになつたのです。天皇の代に新しい政治のし方を、こまかく定めたおきてがつくられましたが、そののちいくたびも改めた上、文武天皇の大寶元年（西暦七〇一年）に大寶律令となつてでき上りました。大化の改新がはじまつてから六十年ほどのこととあります。この規則によりますと、朝廷には太政大臣・左大臣・右大臣をはじめ、たぐさんの役ができて、政治をうけもち、國には

なつて、古いならはしを、とりのぞき、新しい政治をおはじめになりました。時に西暦六百四十五年でありました。この時、はじめて、大化といふ年号を定められましたので、この新しい政治を、大化の改新といひます。

改新の政治で定められた一ばん大せつなきまりは、土地と人民をすべて公の土地、公の人民とし、班田の法といつて、人はみな六歳になると、國家から男女それぞれきまつたひろさの田地を分けてもらひ、一生の間これをたがやすしくみであります。人民は、これからは勢ひの強い氏に仕へるのではなく、誰もが公民としてはたらくことになりました。

大寶律令 つぎの齊明天皇の代にも、中大兄皇子がひきつづき、皇太子として政治をおたすけになりました。阿倍比羅夫が秋田・津輕の方面まで、出かけて、蝦夷をしづめたのは、このころのことです。朝鮮半島では、新羅の勢ひが、ますます強く、唐と力をあはせ

國司がおかれしました。九州は外國とのつきあひの上で、大せつなところでしたから、とくに大宰府がまうけられました。また都に大學、國ごとに國學をおき、役人は、これらの學校で勉強した上、試験に及第したもの中から、ことに定められました。

土地の分け方についても、さらにこまかい規則ができました。しかし班田の法ができて、身分の高い人には特別にひろい土地があたへられました。その上、人の数がふえて、分ける土地が足りなくなつて行つたので、奈良時代になつてから、新しく田地を開くやうにしむけるため、田地を開いた人は、その土地を自分のものにしてよいことにしました。そのために、土地を公のものにしておくたてまへは、あまり長つづきしなかつたのであります。

三 奈良の都

新しい都 新しい制度ができて、朝廷の政治が日本

中にひろく行きわたることになったので、それにふさはしいつばな都をつくらうといふことになりました。そこで天智天皇は近江の大津に、持統天皇は大和の藤原に都をおたてになりましたが、どちらも長くつづきませんでした。やがて、元明天皇の和銅三年（西暦七一〇年）今の奈良市の西部に大きな都がいとなまれました。今からおおよそ千二百三十年あまり前のことです。

それから七代七十年あまりの間、ここがわが國の都となりました。これまでは大てい天皇のおかはりになるたびに、おすまひになる宮の場所も変わりましたし、その場所がにぎやかな町となつたのでもありませんでしたが、これでわが國にも、唐の都の長安とくらべられるやうな都ができたわけです。

はばの廣い道路が、ごばんの目のやうに、きちんと町をくぎり、朝廷のある大内裏や、寺の白い壁、赤い柱の大陸風の建物、あちこちに立つてゐます。物

歌が有名です。

國分寺と大佛 奈良の都が最も榮えたのは、聖武天皇の天平の代であります。天皇は、佛教を深くやまはれ、これをひろめるために、國ごとに、國分寺をお建てになりました。國分寺は、國司の役所の國府とともに、その地方の中心となり、都の文化を、地方につたへる役目をしました。

今でも「國分寺」とか「國分」とかいふ名が、土地にのこり、國分寺の堂や塔の大きな台石が、田や畠の間に見出されたり、その屋根をかさつてゐた布目瓦が、ちらばつてゐたりします。

天皇は、さらに都に、東大寺の大佛をおつくりになりました。大佛の高さが、およそ五丈三尺（およそ十六メートル）、大佛殿の高さが十五丈あまり（およそ四十五メートル）といふ大がかりのものです。かうして佛教が大そう盛んになりますと、それにつれて、美術品をつくるわざも、目だつて上手になりました。今、

を賣り買ふ市も、開かれました。この賣り買ひを、便利にするため、新しく銅で、おかねのつくられたのも、世の中の進歩を示してゐます。それまでは、布や糸や稻などが、おかねの役目をしてゐたのでした。奈良に都ができるすこし前に、武藏の國から、銅がとれるやうになり、それでおかねをつくつたのであります。

記紀と萬葉集 この時代になつて、いろいろな書物が書きしるされるやうになりました。まづ元明天皇の代に古事記が、元正天皇の代に日本書紀ができ上りました。どちらも古くからつたはつた神話や物語などを書きとめた本です。

つぎには、おもに奈良時代の和歌を集めた萬葉集ができました。和歌は昔から日本にあつた文學ですが、これは今のこつてゐる和歌の本では一ばん古いものです。天皇をはじめ一ばんの人民にいたるまでの歌が、四千五百ほど集められてゐます。中でも柿本人麿の

東大寺の中にこつてゐる正倉院や、三月堂などの建物、そこををさめられた数数の宝物や佛像を見ると、そのころの文化がどんなに進んでゐたかが、よくわかります。

和氣清麻呂 しかし都の文化がこんなに榮えても、それをたのしんだのは、朝廷に関係のある身分の高い人ばかりでした。貧しい人民や地方の人人は、低いくらしをつづけてゐました。

また佛教が朝廷からあまりにたつとばれたため、國の費用がかさんだばかりでなく、僧の中には、政治に口を出すものさへあらはれました。中でも道鏡は稱徳天皇に重く用ひられ、高い役につき、つひに天皇にならうとするのぞみをおこしましたが、和氣清麻呂が強く反対して、このくはだてをさまたげました。つぎに光仁天皇がお立ちになり、佛教を大事にしすぎたのを改めるなど、いろいろ政治をたてなはされたのであります。

四 外國との交はり

遣唐使 百濟のことで、一時あらそつた、わが國と唐とは、またちきに仲よくなりました。もとのやうにわが國から、唐へ遣唐使が行き、唐からも使ひがきました。

新羅とも前通りつきあひが行はれました。遣唐使の一行は留學生を加へて、五百人をこえることもありました。これらは四せきの船に分れて乗り、難波（今の大阪）の港を出て、筑前の博多により、東支那海を横ぎつて大陸へ向かひます。そのころの船で外海の荒波を乗りきるのは、容易なことではなく、たびたび吹き流されたり、くつがへされたり、まつたくの命がけの航海でした。

それでも唐のすぐれた文化をとり入れようとする熱心さから、この危険を乗りこえて、そのつとめをはたしたのであります。

からも、使ひを送つて、したしみをかされたのであります。

外國人の渡來 このやうに奈良時代には、東西の交通が大いに開け、海外の國國との交はりには、これまでにないほど、にぎやかなものになりました。鑑真といふ唐のえらい僧が、教へをつたへるためにわが國に渡らうとして、いくたびかなんぎにあひ、めくらとなつても、なほ最初の志をまげないで、とうとう、そののぞみをとげたこともありました。インド人やペルシヤ人が、はるばると海山を越えて、わが國に渡つてきたこともありました。

また唐へ留學して學問ををへ、帰りに船が吹き流されて、國に帰ることができず、そのまま唐の朝廷に仕へて高い位に上り、一生を終つた阿倍仲麻呂のやうな人もあります。

聖武天皇の代は、唐の最もはなやかな時でありました。西は中央アジア、南はインド支那半島までも勢ひをひろめ、まはりの各地でおこつた學問や宗教や美術や工藝などをつたへて、支那の文化は大そう進んでゐました。

しかも、その西の方のアラビヤも、強い國となつてゐたため、たがひのゆききも行はれ、遠く、アラビヤやペルシヤで榮えてゐた文化も、唐に流れこみました。

そこで唐としたしく交はつてゐたわが國にも、こんなに遠い西の方の文化がつたはり、天平の美術工藝は、さらに一そうの色どりを増しました。

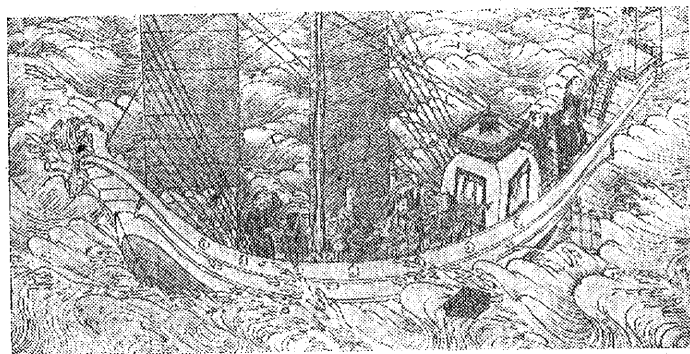
渤海との交はり 元明天皇の代に、滿洲地方に渤海といふ新しい國がおこりましたが、この國からも聖武天皇の代に、使ひがきて、毛皮などの産物を持つてきました。渤海はそののち、國がはろびるまで、およそ二百年の間、たびたび使ひを送つてきました。わが國

問題

一 聖德太子のなさつた仕事についてまとめてみませう。

二 大化の改新とはどんなことですか。また改新の政治で大切なことをあけなさい。

三 國分寺とはどんな寺で、どんな役目をしましたか。近くに國分寺のあとがあつたら、その場所、かまへの大きさ、台石、布目瓦などをしらべてみませう。



遣唐使の船



法隆寺

第三 平安京の時代

一 平安の都

都うつり 光仁天皇のつぎに、桓武天皇が位におつ
きになりました。奈良の朝廷の政治を、すっかりたて
なほすためには、どうしても、都をうつして人人の氣
持を新しくしなければならぬと、考へられるやうに
なりました。そこで桓武天皇は和氣清麻呂のかんがへ
をお用ひになつて、延暦十三年(西暦七九四年)に、山
城の京都の地に、都をおうつしになりました。新しい
都は、三方になだらかな山をひかへ、清い水が流れ
て、けしきのよい土地でありました。その上、東西の
國國とのゆききも便利でありますし、淀川によつて、
難波の港に出るにもつがふのよい場所をしめてゐまし
た。四方から集つてきた人人は、この新しい都を平安京

といひました。それからのもち、明治天皇が東京におう
つりになるまで、およそ千年の間、代代の天皇はここ
においでになりました。ことに、鎌倉に幕府が開かれ
るまでの四百年ばかりは、平安京が、政治の上でも、
文化の上でも、わが國の中心になつてゐたのでありま
す。

蝦夷の同化 都うつりにともなつて、國の中では、
いろいろ新しいところみははじまりました。政治につ
いても改められたところが少くありません。ことに地
方の政治をよくすることに、力がそそがれました。東
北地方は、孝徳天皇の代に今の新潟あたりまで開け、
聖武天皇のころ、今の仙臺あたりまで開けたのであり
ますが、その北の方の蝦夷はまだよくなくつかに、た
びたびわざをひきおこしました。そこで桓武天皇の

代に坂上田村麻呂が征夷大將軍としてしづめに向かひ今の岩手縣あたりまで進みました。朝廷では、蝦夷に田地をあたへ、農業や養蚕の、やりかたを教へたり、また蝦夷を地方の役人にとりたてたりしました。また東國の人人で、東北の地にうつり住み、土地を開いて、蝦夷をみちびくものも少くありませんでした。かうして蝦夷は、國民と一つになつて行き、やがて東北も、他の地方とすこしも変らないやうになつたのであります。

最澄と空海 佛教も新しい時代にふさはしいものがおこりました。最澄の天台宗と、空海の眞言宗とがそれでありました。二人は、桓武天武の代に唐に渡り、それぞれ唐の名高い僧について勉強し、新しい佛教を學んで帰り、これをひろめたのであります。奈良時代には、都の中にたくさんのお寺ができたので、そのために、僧が、政治に口を出したりしましたので、最澄は近江の比叡山に延暦寺を建て、空海は、紀伊の高野山に金剛

峯寺を建て、弟子たちに、山にはいつて一心に勉強することをすすめました。しかし二人とも、山の中にこもつて、世の中のことをなほざりにしたのではありません。空海は、國國をめぐる歩いて、田地を開くために池をつくつたりしました。讃岐の國につくつた萬農池は、今でもその地の農業に役立つてゐます。のちに、最澄は傳教大師、空海は弘法大師の名をおくられました。

二 藤原氏の榮え

攝政と關白 大化の改新に、大きな手がらのあつた中臣鎌足が、病氣でなくなる前に、天智天皇は、鎌足に藤原といふ家の名をおさづけになりました。その子孫の藤原氏は、先祖の鎌足の手がらなどによつて、だんだん勢ひを得てきましたが、平安京の時代にはいつてから、ことに目だつて盛んになりました。このころになると、律令で定められた政治のやりかたも、時勢

三 はなやかな文化

にあはなくなり、ふたたび昔のやうに高い家がらの人が、代代重い役目につくならはしにかへつてしまひました。律令の規則にない新しい役もいろいろおかれたのであります。その中で最も高い攝政・關白は、藤原氏がひとりでしめることになりました。攝政・關白は、朝廷の政治をすべてきりもりする重い役目でありましたから、政治はこれから藤原氏の思ひ通りになつたのであります。

道長父子 宇多天皇は藤原氏のはかに、家からは低いながらも學問にすぐれた菅原道眞をお用ひになり、つぎの醍醐天皇も、道眞を右大臣にして政治をおとらせになりました。しかし藤原氏は、よその氏の人が勢ひを得るのをきらつて、道眞を大宰府にうつしてしまひました。

かうして藤原氏の勢ひは、ますます盛んになりましたが、ことに道長と、その子頼通のころが、藤原氏の一ばんはなやかな時でありました。

文化のうつり行き 藤原氏をはじめ都の貴族たちが榮えて、はでなくらしをするやうになりましたので、これにつれて、はなやかな文化が生まれました。また、道眞の意見により、遣唐使がとりやめられたのち、まもなく、唐がほろび、渤海も、新羅も、つづいてほろびましたので、わが國と、大陸の國國との、公の交はりには、ひとまづ絶えました。そのためもありませう、今まで、支那の文化をとり入れることにいそがしかつた、わが國の文化も、しせんと變つてきたのであります。

大和繪とかな 貴族たちのやしきは、寢殿造といふ建て方になりました。今の日本画のおこりである大和繪も、このころからはじまつてゐます。寢殿造のやしきになつて、ふすまやびやうぶには、日本のけしきや四季のながめなどが、色とりどりの大和繪でふがかれ

ました。

かなが、ひろく使はれるやうになつたのは、とりわけ大せつなことであります。不自由ながら、漢字で用をすませてきた國民は、いつのまにか便利かなをこしらへて、これで國語を書きあらはすことをおぼえしました。かなを用ひると、ふだん使つてゐることはが、そのまま書きあらはせすし、こまかな考へや、感じも、思つた通りにのべることができます。まづこれを用ひた和歌が盛んになり、古今集をはじめ、和歌の本がつぎつぎにつくられました。また物語もつくられるやうになりました。竹の中から生まれて、月の都へ帰つた、かぐや姫の話を書いた竹取物語のやうなものがまづでき、のちには、そのころの世の中のありさまを、こまかにうつしたものがつくられ、つひに紫式部のつくつた、源氏物語のやうにすぐれたものがあらはれたのであります。紫式部のほかに、枕草子を書いた清少納言など、文章の上手な女性が少くありません。

都と地方

貴族の文化が、このやうに榮えてゐたころ、地方はどんなありさまだつたでせうか。貴族たちは、都で花やもみぢをながめたり、歌や音楽をたのしんだりして、はなやかなくらしをしてゐたので、美しい藝術などが榮えましたが、政治に熱心でなかつたため、世の中は、だんだんさがしくなつてきました。地方の役人の中には、自分の利益になることだけを考へてゐるものが多く、地方の政治が行きとどかないので、それにつけてこんでゐるものがはびこり、人民のくらしをおびやかしました。都には市や店が開かれ、物賣りの女が歩くなど、あきなひがはんじやうし、淀川べりには淀・山崎・江口などの船つきばがあつて、にぎやかでしたが、ゐなかなさびしい道すぢには追ひはきが出て、たび人をおそつたり、瀬戸内海では海賊がゆききの船の、つみ荷をうばつたりしました。そればかりではなく都の中にさへ、ぬすびとが出たり、火つけがおこなはれたりするといふありさまとな

んでした。私たちの祖先のこした文化の中には、このやうに女性の手でつくられたものもいろいろあるのです。

鳳凰堂

佛教も、藤原氏をはじめ、貴族の生活のうちにとり入れられて、めづらしいものではなくなりました。寺の建物や佛像・佛画も、みな日本風の、したしみやすいものになりました。道長は、京都に法成寺を建て、頼通は宇治に平等院をつくり、年とつてのち、その寺の中でくらししたのであります。法成寺はあともなくなりましたが、平等院のおもな建物である鳳凰堂は今でものこつてゐて、そのころの藤原氏の榮えをしのばせてゐます。左右に廊下がのびてゐて、ちやうど鳳凰といふきれいな鳥が、つばさをひろげて、空をとんでゐるやうな形をしてゐるところから、鳳凰堂と呼ばれてゐるのです。

四 地方のありさま

つたのです。

莊園

班田の法もほとんどおこなはれなくなつて勢ひのあるものが、莊園といふ領地をたくさん持つやうになりました。藤原氏の勢ひがあつたやうに盛んであつたのも、一つにはそのひろい莊園から、多くの税がはいつてきたからでありました。朝廷では、莊園をすこしでもへらさうと、いろいろ苦心をしたのですが、貴族の勢ひが強いので、ききめがありませんでした。しかし、さうしてゐる間に、この莊園の中から新しい力を持つたものが、だんだん頭をもたげてきます。それは武士でありました。

五 武士のおこり

武士 地方がさがしくなると、農村の人人は、日ごろ田や畠をたがやすかたはら、武器をそなへ、たがひに力をあはせて、自分らを守らなければ安心できません。この場合、その中心となつて、農民をさしづした

のが、莊園に住む有力な地主たちでした。やがて、これらの人人は、いつのまにか、農業よりも弓矢をとるのが、おもな役目になりました。これが武士のおこりであります。

朝廷の役人は、世の中をしづめる力がありませんでしたので、地方にさわぎがおこると、それを平らげるには、いつも、武士の力をかりなければなりません。武士は、ゐなかで質素なくらしをしてゐて、しようと思つたことは、かならず、實行する力を持つてゐましたし、主人とその部下とは、かたく結びついて、たがひにたすけあひましたから、身分は低くても、その勢ひは、あなどることができなくなりました。中でも、ことに名高いのが、東國の源氏と西國の平氏であります。

東國と源氏 東國は、まだあまり開けてゐなかつた上に、京都から遠くはなれてゐるので、都のはでな風気にそまることが少く、しぜん、しつかりした氣風が

平氏の世の中 平氏は、崇徳天皇の代に、忠盛が瀬戸内海の小島を平らげてから、めきめきと頭をもたげてきました。

朝廷では、やうやく藤原氏の勢ひもおとろへはじめてゐました。その上、白河天皇が位をおゆづりになつてからも、上皇の御所である院で、政治をおとりになつたので、攝政・關白も名ばかりとなつてゐたのです。しぜん、地方で實力をやしなつてゐた武士が、京都にも、勢ひをのばしてくることになりました。

たまたま朝廷の内わあらそひがもとになつて、保元の乱が京都におこり、たがひに武士を味方にひき入れて戦ひました。この乱を平らげるのに、一ばん手がらのあつた平清盛の勢ひが、最も強くなりました。そこで源義朝らが、清盛をうたうとして、平治の乱をおこしましたが、かへつて清盛にはろばされ、源氏はちりちりになつてしまひました。やがて清盛は太政大臣に進み、一族も高い役や位にのびりました。平氏の中に

やしなはれ、早くから、武士の團結ができ上つてゐました。

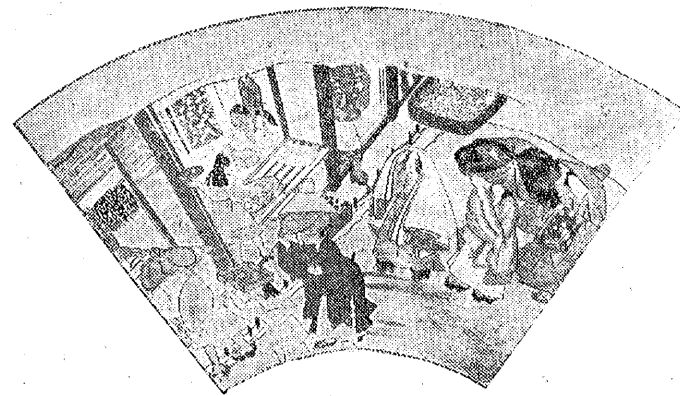
平等院ができころ、奥羽で安倍氏がそむき、源賴義がその子八幡太郎義家と、一しよにこれをしづめました。義家が、敵の大將安倍貞任を追ひつめながら、和歌をよんでこれによびかけたところが、貞任もまた和歌で答へたので、命をたすけたといふ話は、このいくさの時のことであります。そののち、また奥羽がみだれたので、ふたたび義家がこれを平らげました。いくさが終ると、義家は自分の財産を部下に分けあたへていたりましたので、東國の武士は、みな義家になつて、源氏の勢ひが、ますます強くなりました。このやうにして、十二年にわたつてみだれた奥羽は、しづまり、このいくさで、義家をたすけた藤原清衡の勢ひが強くなりました。清衡は平泉に都の風をまねた町をつくりましたが、今でも中尊寺の金色堂に、その名をとりとめてゐます。

は「平家でないものは人でない。」といふものさへ出たほどです。清盛は、そのあひだに、兵庫に港をきづき、唐のあとにおこつた宋と、貿易をこころみたり、瀬戸内海の音戸の瀬戸をきりひらいて、船が通れるやうにしたり、世の中のためになる仕事をしました。しかし勢ひにまかせたふるまひが多かつたので、あちこちからうらまれて、長く榮えることができませんでした。

義朝の子で、平治の乱ののち、東國に流された源賴朝が、兵をあげて平氏をうたうとしますと、源氏の恩を忘れない東國の武士は、みな賴朝の味方になりました。そこで賴朝は、弟義經らを京都に攻めのぼらせました。都で公家のはでなくらしをまねてゐた平氏は、とてもこれにはかなひません。都をすてて西にのがれましたが、義經らがどこまでもこれを追ひかけましたので、とうとう壇浦の戦で一族みなろび、二十年あまりで平氏の榮えも終りとなりました。

問題

- 一 なぜ今の京都の地が都にえらばれたのですか。
- 二 この時代に日本風の建物や繪や、またかな文字などの、できるやうになつたのはなぜでせう。
- 三 かな文字ができたのは文化の発達にどんなに役立ちましたか、またかな文で書かれた本にはどんなものができましたか。
- 四 地方に武士がおこつてきたのはなぜですか。
- 五 東國で源氏の勢ひが盛んになつたのはなぜですか。
- 六 平氏が榮え、またまもなくはろびたのはなぜですか。



京都の店

第四 武家政治

一 鎌倉幕府

幕府のなりたち 源平のあらそひが、源氏のかちいくさに終つたので、政治の権力は、しせん、源頼朝の手にうつることになりました。これまで公家がつつてゐた政治を、武士がとることになつたわけです。そこで、武士の手で新しい政治をおこなふためには、いろいろな役所が必要になつてきます。まづ部下の取りしまりをする侍所さむらいどころができました。それから政治のことを取りあつかふ政所せいどころができました。またうつたへを聞いたり、そのさばきをする問注所もんちゅうどころができました。侍所の仕事は、部下の武士でも十分まにあひますが、政治や裁判などのことは、これまでそんな仕事をしたことのない部下にまかせるのは、心配であります。そこで

頼朝は、今までその仕事をしてゐた人を京都から招いて、これにあたらせることにしました。

このころ頼朝の命令は、一部の地方にしか行きとどきませんでした。それで全國に自分の力を行きとどかせるには、どうしても地方を治めるしくみをつくらなければなりません。平氏はほろびましたが、世の中はまだすっかり平和になつたわけではありません。その上、平氏をほろぼすのに手がらをたてた弟の義經が、兄のうたがひをうけて行くへをくらし、そのゐどころさへわからないあります。頼朝は、これをよい事にして、義經をさがし、世のみだれを防ぐためといつて、全國に守護と地頭じとうをおくことを、朝廷に願ひ出しました。守護は國ごとにゐて、警察の仕事をし、地頭は地方の莊園にゐて、税をとり立てる役目でありま

す。朝廷の許しをうけた頼朝は、それぞれ自分の部下を、守護や地頭にしました。このやうにして、頼朝は、政治の実権をすつかりに握ることになりました。まもなく、建久三年（西暦一九二二年）に、頼朝は、征夷大將軍に任せられました。ここに新しい政治のしくみができ上りました。これが武家政治であります。征夷大將軍が政治をとる役所を幕府といひますが、その幕府のおかれた鎌倉の名をつけて、鎌倉幕府といひます。武家政治は、こののち、いくたびか浮き沈みはありましたが、明治維新まで、七百年ばかりつづきました。

執権政治 頼朝は、弟たちを殺してしまつたので、源氏は、三代二十八年ではろびてしまひました。頼朝が死んだのちは、妻の政子とその一族北條氏が、幕府の實権をにぎりました。政子の父北條時政は、頼朝が兵をあげてから、すつと変らず頼朝をたすけ、のちには政所の仕事をして執権といひ、幕府のうちで一ばん

実際に役に立つやうにできてゐましたので、こののち長く武家のおきての根本になりました。

泰時の孫頼朝も、すぐれた執権の一人であります。時頼は、母松下禪尼の教へをよく守り、質素な暮らしをして、部下の根本になりました。そして貞永式目をもとにして、よい政治をおこなひました。執権をやめてからも、幕府の政治が、正しくおこなはれてゐるかどうかを見るために、國國をまはり歩きました。

蒙古の來襲 時頼の子時宗が執権の時、蒙古の來襲がありました。大陸では、五十年ほど前に、蒙古の成吉思汗が出て四方をしたがへ、その孫忽必烈の時には、朝鮮半島にまで力をのばしてきました。そしてまもなく國の名を元と改めました。

忽必烈は、勢ひにまかせて、わが國までもしたがへようとし、たびたび使ひや手紙を送つてきました。わが國では、その手紙が無禮なので返事をしませんでした。すると忽必烈は、文永十一年（西暦一二七四年）

重んぜられてゐました。その子義時もまた執権となり、さらに侍所の仕事もするやうになりましたので、幕府の実権は、すつかり北條氏の手につつてしまひました。源氏がほろびたのち、源氏の血すぢを引いてゐる幼い將軍が、京都から迎へられました。しかし將軍といふのは名ばかりで、幕府の政治は執権北條氏の思ひ通りになつたわけです。これを執権政治といひます。執権政治は、こののち鎌倉幕府がほろびるまでつづきます。

貞永式目 時政の子義時からのち、執権には、つづきにりつばな人が出て、よい政治をおこなひました。義時の子泰時は、そのうちで最もすぐれた人でありました。評定衆をおき、これと相談した上で政治をし、つねに政治が公平になるやうに心がけたので、人人は心から泰時にしたがひました。泰時が定めた貞永式目は、幕府の政治や裁判などのことをきめたおきてで、五十一條からできてゐます。かんたんながら、

十月、九百せきあまりの船に、およそ四万の兵を乗せて、博多湾に攻めこまれました。武士たちは、勇ましく戦ひましたが、敵が上陸してきたため、大そうなんざをしました。ところが、大風がおこつて、敵の船をくつがへしたので、これを退けることができました。

忽必烈は、それでもわが國をしたがへることを思ひきりません。こののち、弘安四年（西暦一二八一年）七月には、四千四百せきの船に、十四万の大兵を乗せて、ふたたび博多湾に攻めよせてきました。この時もまた大あらしがおこつて、敵の船を吹きちらしてしまひました。

二 社會と文化

武士の生活 政治の実権は、公家の手からはなれてしまひましたが、公家は京都で、昔とあまり変らない生活をしてゐました。しかし國民の中心となつて、世

の中をみちびいて行つたのは、武士であります。武士といつても、鎌倉にゐるものばかりではありません。大ていものは地方に住んでゐたのです。

もともと武士は地方の莊園にゐた小さな地主であります。自分で田や畠をたがやして、農業をしてゐたものも少くはありませんでした。地方の武士の目目のくらしは、質素な農民のくらしとあまり変らないものであります。これで武士のくらしが質素を重んじたわけがわかります。

武士のすまひは、板ぶきや草ぶきで、まはりに土手や垣をめぐらしたり、堀をほつたりしたものであります。このやうなすまひの建て方を武家造といつて、公家の寝殿造にくらべると、すつとかんたんなものであります。

商業の發達 地方には、國民のうちで一ばん数の多い農民が武士と一しよに住んで、農業にはげんでゐました。この武士や農民が、生活に必要な品物を取りか入や僧の往來は盛んにこなはれて、大陸の文物が持ちこまれました。唐のあとにおこつた宋との間にも、この關係がつづきます。禪宗には榮西の臨濟宗、その弟子道元の曹洞宗があります。また宋や元から多くの名僧が、遠く海を渡つてきました。禪宗はおもに武士の間に信ぜられてゐました。

學問と藝術 學問は、おもに公家や僧の間でこなはれてゐましたが、あまり盛んであつたとはいへませんでした。武士の中にも學問をこのむ人が出ました。北條實時・顯時父子が、武藏の金沢の稱名寺に金澤文庫をおこして、たくさん書物を集めたのが、今ものこつてゐます。大學・國學の制度は、もうすたれてしまつて、寺の中で、新しい教育が、おこなはれるやうになりました。

文學では、昔からわが國ぶりをつたへた和歌がなほ盛んで、公家と僧が中心でありました。藤原定家は、このころ第一の和歌の名人であります。定家らが、後

へるために、日をきめて市が立ちました。京都や鎌倉のやうな都市では、物を賣る店が集つて市町となり、人人は、いつでもほしい物を買ふことができました。かうして商業が發達してきたので、爲替や問屋などがおこり、遠い土地との間でも、自由に取引ができるやうになりました。

新しい佛教 これまでの天台宗や眞言宗は、おもに貴族の間に信ぜられて、武士や農民などとはあまり關係がありませんでした。ところがこの時代になると、武士や農民の心によく合ふ新しい佛教の宗派が、つぎにおこりました。法然の開いた浄土宗、その弟子親鸞のはじめた眞宗(一向宗)、一遍のおこした時宗、日蓮のとなへた法華宗(日蓮宗)などです。これらの宗派は、どれもみなわかりやすく、入りやすいので、武士や農民の間に、ひろく信ぜられました。また宋から禪宗がつたはりました。遣唐使が廢止されてから、支那との公の交はりには、すつと絶えてゐましたが、商

鳥羽上皇のおほせをうけて、新古今集をつくりました。これはこののち長く和歌をよむものの手本になりました。公家や僧ばかりでなく、武士の中にも、りつばな和歌をよんだ人が少くありませんでした。とくに源氏の將軍實朝の和歌がすぐれてゐました。

かなまじりの力強い文章で、武家の榮えたりおとろへたりしたありさまをつづつた物語が、たくさん書かれました。これを軍記物といひます。中でも平家物語が有名であります。これは琵琶にあはせて語られ、すつとのちの世まで喜ばれました。

建築や彫刻にも、國民生活をうつしたものが見られます。建築では、禪宗の寺院に、宋の建て方がつたはり、それに日本風が加へられました。彫刻では運慶・湛慶らの名人が出ました。今も東大寺にのこつてゐる仁王像は、運慶がつくつた作品の一つであります。

繪画では、大和繪が盛んで、物語や、社寺のいはれなどをかいた繪巻物が流行しました。繪巻物は、繪と

文章をかはるがはるかいた長い巻物であります。今にすぐれたものがたくさんこのつてゐます。

工藝では、武器をつくるのが盛んであります。よろひ。かぶとや刀などは大へんりっぱなものができました。刀では岡崎正宗が名人でありました。

問題

一 武家政治はどうしてはまりましたか。これまで學んだところをふりかへて考へてごらんさい。

二 源頼朝はどうして守護と地頭をおいたのですか。守護と地頭の役目はどんなことでしたか。

三 武士はどういふ生活をしてゐましたか。またどんな家に住んでゐましたか。

四 どうして新しい佛教がおこつたのでせうか。

五 繪巻物とはどういふものですか。



禪 宗 の 寺

第五 鎌倉から室町へ

一 建武のまつりごと

朝廷と幕府 政治の実権は、武家政治の時代になつて、朝廷からはなれました。後鳥羽上皇は、政治の実権を、武家からとりかへさうとお考へになりました。源氏がはろびたあとで、上皇は、執権義時をうつて幕府を倒すはかりごとをお立てになりましたが、失敗してしまひました。これを承久の変といひます。

後醍醐天皇のあとに、後深草天皇、龜山天皇と、御兄弟が、つぎつぎに位におつきになりました。幕府は、このお二方の子孫が、かはるがはる位におつきになるやうに定めました。幕府を倒すはかりごとが二度とおこらないやうにするつもりだつたのです。

幕府のおとろへ 蒙古の來襲を防ぐために、幕府は

その力を大かたつかつてしまひました。それで、手ごらを立てた部下の武士に、十分賞をあたへることができません。その上、武士もこのいくさでたくさんのお金を費をつかつたので、その生活は目に見えて苦しくなりました。幕府は、力とたのむ部下がこまつても、それを救つてやる力がなくなつてゐました。

その上に、執権高時は、いろいろな遊びがすきで、せいたくなことばかりして、すこしも政治に心をいれようともしませんでしたので、人人の心は、だんだん幕府からはなれて行きました。

このやうな時に、後醍醐天皇が位におつきになりました。天皇は、高時をうつて、幕府を倒すはかりごとをお立てになりましたが、はかりごとがもれて失敗しました。けれども天皇のご決心は変わりません。まもなく

く第二回のはかりごとをお立てになりました。このたびも、用意ができないうちに、鎌倉に知れてしまひました。そこで、天皇は、笠置山にもつて、國國の武士をお召しになりました。高時は、大軍をさしむけて、笠置山をおとしいれ、天皇を隱岐の島におうつししました。これを元弘の変といひます。

河内の楠木正成は、お召しをうけると、すぐに兵をあけて、幕府の大軍を大いになやました。それを聞いた國國の武士は、一度に立ち上りました。天皇は、このやうすをお聞きになり、こつそり隱岐を出て、伯耆の國においでになりました。

高時は、おどろいて、足利高氏を伯耆に向かはせましたが、高氏は、途中で幕府にそむき、京都にあつた北條氏の一族を攻めほろぼしました。關東でも、新田義貞が兵をあけて、鎌倉に攻め入つたので、高時は一族と一しよに自殺し、北條氏も鎌倉幕府も、ともにほろびてしまひました。時に元弘三年（西暦一三三三年）

武家の仲は、だんだんはなれて行きます。武家のうちには、武家政治の方がよかつたと思ふものさへ出てきました。建武の中興は、この公家と武家の仲たがひから失敗することになりました。

京都と吉野 高氏は、天皇の御名尊治の一字をいただいて尊氏といひ、武士のうちで一ばん勢ひがありました。自分が源氏の一族なので、ふたたび源氏の幕府を、おこさうとする野心を持つてゐました。その時に、關東で北條氏の一族がそむきました。尊氏はこれをうつて、征夷大將軍になることを願ひましたが、お許しがありません。そこで勝手に鎌倉に下つてそむきました。まもなく京都に攻めのはりましたが、さんざんにまけて、九州へにげました。九州でなくさんの武士をしたがへた尊氏は、大兵を海と陸の二手に分けて攻めのはりました。途中、湊川で正成をやぶり、勝ちに乗つて京都に攻め入りました。

そして、後深草天皇の子孫である光明天皇を立て

て、頼朝が幕府を開いてからおよそ百四十年でありました。

建武の新政 天皇は、まもなく京都におかへりになつて、新しい政治のしくみをおつくりになり、記録所^{しきろく}でしたしく政治をおとりになりました。裁判をする惟^{ただ}訴決斷所^{しゆけつだん}や、京都をまわる武者所^{むしゃ}をおき、國司と守護とで、地方の國國を治めさせました。あくる年の正月に、年号が建武と改まつたので、これを建武の中興といひます。

天皇は、皇子護良親王^{みよりなり}を征夷大將軍とし、手がらにあつた公家や武士を、それぞれ重い役におつけになりました。けれども、長い間政治からはなれてゐた公家では、政治はうまくはかどりません。その上に、幕府が倒れたので、公家は武家をあなどりました。武家は、このたびのことは、自分たちが命がけで戦つたから成功したのだと思つてゐるのに、公家が重んぜられるのを見ると、不平でたまりません。かうして公家と

て、皇位のしるしをお渡し下さるやうに後醍醐天皇に願ひました。天皇は、にせのしるしを光明天皇に渡し、こつそり京都を出て吉野におうつりになり、こゝで政治をなさいました。時に延元元年（西暦一三三六年）でありました。このうち四代五十七年の間、吉野が皇居になりました。一方京都には、光明天皇がおいでになりました。これからは、公家も武家も、思ひひに、両方の朝廷に仕へて、たがひに争ひをつづけることになりました。

このうち尊氏の孫義満は、吉野の後醍醐天皇に、京都におかへりになることを願ひました。天皇は、この願ひをお聞き入れになつて、京都の後小松天皇に、位をおゆづりになりました。これで、朝廷は一つになつて、長い間の争ひはしづまり、また平和な時代になりました。

二 室町幕府

幕府の成り立ち 尊氏は、延元三年（西暦一三三八
年）光明天皇の許しをうけて、征夷大將軍になりま
した。そして鎌倉幕府を本にして幕府をつくりまし
た。こののち義満の時になつて、足利氏の勢ひが強
なつたので、幕府のしくみもでき上りました。義満は
京都の室町むろまちのやしきを幕府にしたので、足利氏の幕府
を室町幕府といひます。

幕府には、將軍が政治のことを相談する管領くわんりやうといふ
重い役があつて、斯波・細川・畠山はたけやまの三つの家が、こ
の役につくことになつてゐました。管領の下に、鎌倉
幕府と同じく、政所と問注所と侍所がありました。中
でも侍所が一ばん重い役所でした。幕府は、鎌倉に關
東管領をおきました。關東管領には、足利氏の一族が
なりました。地方の國と莊園には、守護と地頭がゐま
した。

政治のみだれ 尊氏が朝廷にそむいた時、たくさん
の賞をあたへる約束をして、武士たちをさそひまし
地頭からとり立てようとしてもなかなか幕府のいふこ
とを聞きません。

それで人民から、税をとり立てることにしました。
このころも、國民の中心となつたのは、やはり武士で
した。けれども國民の中で一ばん数の多いのは農民で
す。幕府はその農民から重い税をとり立てることを考
へました。農民がたがやしてゐる田や、住んでゐる家
にまで税をかけることにしたのです。またゆききのは
げしい道路や、船の出入りの多い港に關所かんしよをつくつ
て、人馬や荷物や船に税をかけました。それでもまだ
足りないので、京都の金持の商人から重い税をとり立
てました。商人たちは、重い税をさめるかはりに、
幕府の役人やくにんとくんで、いろいろよくないことをして利
益をあげることを考へました。これでは人民が一ばん
ひどい目にあふばかりです。

そのために苦しんだ人民は、大せい力をあはせて一
揆いぎをおこしました。これを土一揆とも徳政一揆ともい

た。それで、將軍になつても、部下をとりしめること
ができません。部下の中には、いくつもの國の守護に
なつて、將軍の命令をきかないものが出ました。これ
が幕府の政治のみだれるもとになりました。

その上、義満や義政のやうに、はでなことのすきな
將軍が出たので、幕府の費用はだんだん足りなくなつ
てきました。そんなことにはすこしもかまはず、義満
は、室町にりつばなやしきをつくりました。人人は、
これを花の御所といひました。義満は、京都の北山に
せいたくなべつさうを建てました。かべや柱などに金
ばくをはつたので、これを金閣きんかくといひます。義政も、
義満をまねて、東山に銀閣をつくりましたが、途中で
費用がつづかなくなりました。

盛り上る力 將軍がこのやうなせいたくをする費用
は、どこから出たのでせうか。幕府は、全國にたくさ
んの領地を持つてゐました。けれども、そこからとり
立てる税だけでは、たうていまにあひません。守護や

ひました。幕府には、もうそれをしづめる力はありません。
せん。それで世の中はだんだんさわがしくなりました。

應仁の乱 このやうに幕府の政治のみだれ、世の中
がさわがしくなつて、應仁の乱がおこりました。義政
が、せいたくにふけて政治に力をいれないのをよい
ことにして、管領の細川勝元と山名宗全が、勝手に勢
ひを争つてゐました。そこへ義政のあとつぎのことで
いざこざがおこり、幕府の中は、勝元方と宗全方の二
つにはつきり分れてしまひました。斯波氏や畠山氏の
間にも、同じやうなことがおこつて、家の中が二つに
分れました。これがもとになつて、京都でいくさがは
じまりました。やがて、戦ひは全國にひろがり、それ
が十一年もの間つづいたのです。京都では、御所も、
公家や武家のやしきも、たくさんたくさんの社や寺などもみな
焼けて、古い宝物もすべて失はれてしまひました。こ
れまで榮えてゐた都は、一めん焼け野原になつてしま
ひました。けれども、この焼けあとから、新しい力が

生まれ出て、つぎの新しい世の中ができて上ってくるのです。

三 経済と文化

経済の発達 室町幕府の時代は、政治がみだれ、つひには應仁の乱がおこるなど、世の中はおだやかではありませんでした。けれども、その間に國民の生活はだんだん進み、それにつれて経済も発達しました。農業はしだいに進んで、米のあとに麥をつくることも、ひろくおこなはれるやうになりました。宇治の茶が有名になり、甲州ぶどうや紀州みかんが出はじめたのも、このころのことです。漁業も盛んで、あちこちに水産物を賣り買ふ魚市場ができ、瀬戸内海の沿岸では塩田を開き、大がかりに塩をとるやうになりました。日目の生活に必要な道具を作つたり、外國に輸出したりしたので、鉄・銅・金・銀などの産額もふえ、それにつれて鉱業や工業も発達しました。

中國・九州の人民のうちには、遠く支那や朝鮮に渡つて、貿易をしたものがありました。取り引きが思ふやうにならないと、武力をふるふことがありましたので、大陸では倭寇といつて恐れられました。

この支那との貿易は、大そう利益になつたので、尊氏は、京都に天龍寺を建てる費用をつくるために、貿易船を元に送りました。これを天龍寺船といひました。支那では、元のあとに明がおこりました。義満は、貿易で利益を得ようと思つて、明と交はりを開きました。そして明から日本國王といはれ、明へ送る手紙に臣と書きしました。義持の時に、明との交はりをやめてしまひましたが、義政は、また明と交はりを開いて、盛んに貿易をしました。明へは、刀や銅その他の鑛産物や、工藝品を輸出し、そのかはりに、銅錢・生糸・絹織物・書画などを輸入しました。朝鮮との貿易も、このころ盛んにおこなはれました。

文化の発達 幕府が京都にあつたので、武家と公家

いろいろな物産が、たくさん出まはるにつれ、商業も進んできました。これまで日をきめて立てられた市も、あるところでは毎日開かれ、しまひには店になつてきました。また京都やその近くに、米や魚だけを取り引きする進んだ市場さへできました。ここで取り引きするのは、もう一ばんの人人ではなく、商人たちでした。

物の賣り買ひに錢を使ふことも、もう一ばんに行きわたつて、おもに明から輸入した永樂錢が用ひられました。それにつれて爲替や問屋のしくみも、ととのつてきました。ずつと前から商工業者は、同じ仲間で組合のやうなものをつくり、領主に税をさめるかはりに、自分たちだけで商賣をすることを許してもらつてゐました。これを座といひます。この座も、このころになつていよいよ発達しました。

外國貿易 國內の経済が発達するとともに、外國貿易も盛んになりました。蒙古が來襲したのちも、四國・

の仲は、大そうしたしくなりました。將軍は、公家と同じやうに、朝廷から、高い位をいただき、重い役に任せられました。武士の生活は、だんだん公家の生活に近くなつて、武家の文化と公家の文化が一つにまつまつてきます。また武家が深く禪宗を信じたので、文化の上に、禪宗のあつさりしたおもむきが加はり、これがひろく國民全体に行きわたりました。

佛教 禪宗は、武家が大せつにしましたので、いよいよ盛んになりました。禪宗の僧のうちには、將軍の政治の相談相手になつたものもありました。義満の時、京都と鎌倉の五つの大きな寺が、五山といはれて重んぜられました。一方人民の間には、法華宗・淨土宗・一向宗が、ますますひろまつて行きました。

學問と文學 學問は、おもに公家と五山の僧の間で盛んでありました。とくに五山では、詩や文章をつくるのがはりました。これを五山文學といひます。また學問は、武家の間にもひろく行きわたりました。

関東の足利學校には、遠く九州から勉強にきたものもありました。寺の中での教育はこのころになつて、ますますひろまつて行きました。これがのちに寺子屋になります。

和歌もなほ行はれてゐましたが、連歌はやり、武家や人民の間にとくに喜ばれました。連歌は、たくさんの人があつまつて、一つづきの長い句をつくるのです。宗祇は連歌の名人として有名な人でした。

美術工藝 義政は、大そう美術がすきでしたので、美術工藝は目だつて発達しました。繪画はとくに盛んで、支那から輸入された宋や元の名画は、人人に大そう喜ばれ画家にはよい手本になりました。画家の中でも雪舟が有名であります。雪舟は、支那の繪のかき方を習つて、墨だけで山や川や湖の景色をかきました。狩野元信は、わが國と支那の繪のかき方を一しよにして、新しい狩野派をおこしました。これはすつとものちまで盛んであります。

下へ下へと、力のあるものに行きました。地方でも、古い家はほろびて、実力のあるものがこれにかはりました。かうして、実力のある大名が、新しくおこつて、國國を分け取り、たがひに、勢ひを争ふことになりましたので、この時代を、戰國の世ともいひます。

大名の分立 関東では、関東管領の家もいつのまにかおとろへ、部下の上杉氏が勢ひがありました。これも新しくおこつた北條氏に、追ひはられてしまひました。中部地方では、越後に上杉氏、甲斐に武田氏がをり駿河では、今川氏が勢ひがありました。中國地方では、はじめ大内氏が榮えてゐましたが、のちに毛利氏がこれにかはりました。四國の長宗我部氏、九州の大友氏・龍造寺氏・島津氏などが勢ひを持つてゐました。これらの大名は、すぎがあれば隣りの國を攻めとらうとしてゐました。そしてよい政治をして、自分の國をよく治めました。中でも北條氏や、武田氏の政治

工藝では、刀のかざりに金銀で手のこんだ細工をする後藤祐乗といふ名人が出ました。そのほか、蒔繪や陶器もりつばなものがたくさんできました。

風俗と生活 武家のすまひは書院造といつて、今の私たちの家に近いものになりました。これは禪宗の書院のつくりをまねたもので、玄関や床の間をつけ、部屋は障子でしきり、疊をしくやうになりました。庭には水と石をうまくとりあはせて、せまい庭をひろく見せ、深山のやうなしづかな氣持を出さうと工夫しました。今も京都の寺には、このころのりつばな庭がのこつてゐます。茶の湯や生花がはじまり、能や狂言が喜ばれました。七月のお盆に、人人が集まつてをどる盆踊もこのころから盛んになりました。

四 新しい時代への動き

世のありさま 應仁の乱からのち、幕府の力はおとろへてしまひました。將軍はただ名だけで、実権は、

はりつばなものであります。

大名のある城のまはりには、たくさんの人が集つて、にぎやかな町になりました。これを城下町といひます。城下町は、しせんに、その地方の、政治や商業の中心になりました。大名がとくに力をいれたので、農家にはかに発達し、鑛業の技術も大そう進みました。

皇室のおとろへ これまで領地からあがる税と、幕府がさしあげる費用とで、おくらしになつてゐた皇室は、幕府の力がおとろへた上に、領地は地方の武士がつてしまつたので、大そうおこまりになりました。御所は荒れても、つくろふことができないありさまでした。

このおこまりのありさまを知つた地方の大名の中には、すすんで皇室の費用をさしあげるものが多くなつてきました。

世界の波 このやうな時に、ヨーロッパ人がはじめ

て渡つてきました。ヨーロッパでは、このころ航海術が進み、ポルトガル人はアフリカの南をまはつて、インドにくる航路を発見しました。そして東洋の國國と盛んに貿易をしてゐました。天文十二年（西暦一五四三年）ポルトガルの商船が、九州の南の種子島に流れつきました。そしてわが國に鉄砲をつたへました。鉄砲は、これまでの武器にくらべると、ずつとすぐれてゐましたので、たちまち全國にひろまりました。まもなく堺をはじめ、各地で鉄砲がたくさんつくられるやうになつて、これまでのいくさのやり方は、變つてしまひました。こののち、イスパニヤの商船もくるやうになり、ポルトガルの商船といつしよに貿易をしました。この人人は、みな南の方からくるので南蠻人といはれました。これからわが國は世界の歴史の仲間入りをするやうになりました。

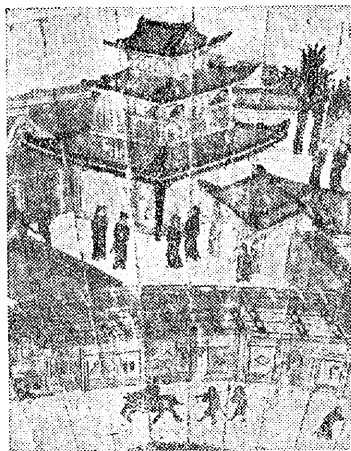
また天文十八年（西暦一五四九年）には、クリスト教の宣教師フランシスコ・ザビエルがきて、その教へを

つたへました。わが國では、この教へを、きりしたん宗といひました。

このやうに、國の内からも外からも、新しい世のものが生まれる動きがおこつてきました。駿河の今川義元、越後の上杉謙信、甲斐の武田信玄らは、早く京都にのぼり、皇室をいただいて、國內を一つにまとめようと思ひました。けれども、みなその目的をとげるこゝろができませんでした。全國統一のもとをつくつたのは、織田信長であります。

問題

- 一 鎌倉幕府はなぜおとろへるやうになつたのでせうか。
- 二 建武の中興が失敗したのはなぜでせうか。
- 三 この時代の美術はどうして発達しましたか。
- 四 ヨーロッパ人が渡つてきてから、世の中にどんな変化がおこりましたか。



南 登 寺



雪 舟 の 絵



室 町 こ ろ の 農 村

第六 安土と桃山

一 國內の統一

安土の城 織田信長の家は、もと管領斯波氏の部下で、代々尾張に住んでゐました。信長が、東隣の今川義元をたふしてから、にはかに、勢ひが強くなりました。

正親町天皇は、信長の名をお聞きになつて、領地を武士の手からとりかへすことを命ぜられました。このころ京都では、將軍義輝が部下に殺されたので、弟の義昭が信長をたよつてきました。信長は、すぐに義昭と一しよに京都にのぼり、朝廷に願つて、義昭を將軍にしてみもらひました。

信長は、長い間、荒れたままになつてゐた御所の、つくろひをはじめました。ひまをみては、自分で、工

事を見まはりましたので、二年あまりののちには、すっかり見ちがへるようになりました。こののも、御領地を、とりかへしたり、御費用をさしあげたりしました。

義昭は、はじめのうちは、心から信長をたよりにしてゐましたが、信長の勢ひが強くなるのを見て不安になりました。信長を除かうとしましたが、かへつて信長に京都を追ひはらはれてしまひました。時に天正元年（西暦一五七三年）でありました。尊氏が幕府を開いてから、二百三十年あまりで、室町幕府はほろびました。

この間に、信長は、近江の安土に大きな城をきいて、全國統一の仕事を進めて行きました。

信長は、こののち徳川家康と一しよに、甲斐に攻め

入つて、武田氏をほろぼしました。また部下の羽柴秀吉をやつて、中國の毛利氏をうたせました。秀吉をたすけに行かうとして、安土をたち、京都の本能寺にとまりましたが、部下の明智光秀に殺されました。このために、全國統一の仕事は、中途でつまづきました。信長の志をついで、これを成しとげたのが秀吉であります。

全國統一 秀吉は、信長が殺されたしらせをうけると、すぐに毛利氏と仲なほりをして、光秀をほろぼしました。そして信長の部下もつぎつぎに秀吉にしたがひました。徳川家康とも、一度は尾張で戦ひましたが、まもなくこれと手をにぎりしました。それから四國の長宗我部氏、九州の島津氏をしたがへ、最後に關東の北條氏をほろぼして、全國統一の仕事を成しとげたのであります。天正十八年（西暦一五九〇年）のことです。應仁の乱から百三十年あまりで、國內はやうやく平和になりました。

聚樂第 秀吉は、光秀をほろぼしたのも、大阪に大きな城をききました。城のまはりには、にぎやかな町になりました。大阪の榮えるもとができたのです。全國統一が進むにつれて、秀吉は、高い位に上り、關白に任せられて、豊臣といふ家の名をたまはりました。秀吉は、京都に聚樂第をつくり、ここに後陽成天皇の行幸をあふぎました。この時、皇室に御料をさしあげ、公家にも、それぞれ領地をおくりました。

新しい政治 信長や秀吉は、いつも國全体のためを考へて、いろいろ新しい政治をしました。

まづ、農業は、一ばん大せつな産業でしたので、そのもとなる土地を、しらべることがはじまりました。信長も秀吉も、新しく、土地のひろさをはかり、その良しあしを、きめて、米のとれ高を計算させました。これを檢地といひます。秀吉は、全國の檢地をしました。

この檢地で、これまで、莊園ごとにちがつてゐた土

地のはかり方や、よび名が、すっかり一つになりました。

戦國では、これまで、長い間おかねをつくりませんでした。それで、おもに明から輸入した、永樂銭が使はれてゐました。その中にはいろいろ質のよくない銭がありましたので、物を買ふのに不便なときがありました。

このころ鑛業が発達して、金や銀や銅がたくさん出ましたので、秀吉は、これで金貨や銀貨や銅貨をつくつて、人人の不便をのぞかうとしました。金貨はその大ききで、大判・小判といはれました。

戦國の世には、大名は、敵に攻められることを心配して、人人の不便などは考へずに、道路は荒れたままにしておきました。そして、國ごかひの大事なところに関所をつくり、通る人をしらべて、人馬や荷物などに税をかけました。信長は、道路をつくつたり、橋をかけたりに上には、関所をすつかりやめてしまひました。なつたわけです。これを刀狩といひます。

二 外交と文化

外交の失敗 秀吉は、早くから海外に力をのばさうと思つてゐました。全國を統一したのち、明をうつはかりごとを立て、朝鮮にその道案内をたのみました。けれども朝鮮は、明の勢ひを恐れて聞き入れませんでした。まづこれをうつことにしました。

文祿元年（西暦一五九二年）大軍が朝鮮に向かひました。秀吉は、肥前（ひぜん）の名護屋（なごや）にゐて、これをさしづしました。わが軍は、その都の京城（けいじやう）をおとしいれ、朝鮮をたすけにきた明の兵をうち破りましたが、海軍がふるはないので、食糧（しよくりやう）を送るのに大そうこまりました。やがて明から申し出てきましたので、ひとまづ仲なほりをするにしました。これを文祿の役といひます。

けれども、この仲なほりの約束に行きちがひがあ

た。これで、どれだけ便利になつたかわかりません。秀吉は、これまでまちまちであつた、道のりのはかり方を改め、おもな道路には、一里ごとに塚をつくつて、道のりをはつきりさせました。

戦國の大名の中には、これまでの座をやめて、誰でも自由に商賣ができるやうにしたものがありました。信長や秀吉も、これと同じやり方で商工業をすすめました。そこで交通は便利になり、商賣も自由にできるようになつたので、城下町にはぎはひ、商工業も大さう発達しました。

戦國の世では、領主の命令があれば、誰でも、武器をとつて戦はなければなりません。世の中を平和にするには、それぞれ自分の仕事に力をいれさせることが大せつであります。それで秀吉は、武士以外のものから、刀や槍（やり）や鉄砲（てつぽう）をさし出させました。これで武器を持つものと、持たないものとの區別がはつきりました。農民は、平和に農業をはげめばよいことに

り、明から秀吉を日本國王にするといふ手紙を送つてきました。秀吉は大そう怒つて、慶長二年（西暦一五九七年）ふたたび大軍を朝鮮に攻め入らせました。今度は、文祿の役のやうにうまく行かず、朝鮮の南部で苦しい戦ひがつづきました。そのうちに秀吉が死んだので、ゆゑにあらがひにたがつて、將士はみな國に帰りました。これを慶長の役といひます。

この役は、七年もかかつて、多くの人の命とたくさん費用をむだにしただけでありました。

少年使節 信長は、きりしたん宗をひろめることを許しましたので、京都や安土に教會堂（きやうかいだう）が建ち、學校もできました。この教會堂を人人は南蠻寺（なんばんじ）といひました。大名の中にも信者が多くなりました。九州の太友・大村（おほむら）・有馬（ありま）の三人の大名は、ことに熱心な信者で、天正十年（西暦一五八二年）には、はるばるローマ法王（はふやう）のところに使ひを送つたほどでありました。この使ひにえらばれたのは、伊東（いとう）満所（まんじやう）、千々岩（ちぢい）清左衛門（せいざゑもん）

らで、みな十歳あまりの少年でした。少年たちは、ローマで大へんなもてなしをうけ、いろいろめづらしいみやげ物をもらつて、天正十八年（西暦一五九〇年）に帰りました。

秀吉は、九州をしたがへてから、きりしたん宗をひろめることを禁じました。けれども、ヨーロッパの國との貿易は許しました。マニラにゐるイスパニヤの総督やゴアにゐるポルトガルの総督に、貿易のことで手紙を送つてゐます。

桃山文化 このころは、古いものがすたれて新しいものがおこり、長い間の世のミダレが治まつて、平和になつた時でありましたから、世の中はみないきいきとしてゐました。また信長や秀吉は、のびのびとしたことをこのみしましたので、文化の上にも、しぜんにその氣持が出ました。秀吉が年をとつてから住んでゐた伏見城のあとを桃山といひましたので、これを桃山文化といひます。

松原で、大がかりな茶の湯の會をして、茶の湯のすきな人は誰でも仲間に入れました。

問題

- 一 秀吉は、全國を統一してからどのやうな仕事をしましたか。
- 二 刀狩があつて、世の中はどんなに変わりましたか。
- 三 きりしたん宗がひろまつてから、どういふことがおこりましたか。

信長や秀吉は、安土城・大坂城・伏見城などの、大きな城をきづきました。京都の西本願寺の唐門は、このころ伏見城にあつたものです。城の中には、ふだんに住む書院造の家も建てられました。書院造は、ますますりつぱになつて、美しい繪をかいたふすまや、こみいつた彫刻でかざられてゐました。繪では狩野派が大そう盛んで、永徳や山樂のやうな名人が出ました。そして、金や濃い緑の色を使つて、大きな繪をかきました。

京都で、美しい金襴が織りはじめられ、西陣織の発達するものになりました。文祿・慶長の役の時、九州の大名のうちには、朝鮮の陶工をつれて帰つたものがありました。これから有田焼や薩摩焼などがおこりました。

茶の湯はますます盛んになりました。千利休が、茶の湯の作法をつくりあげたのは、このころのことです。秀吉は大そう茶の湯がすきでした。京都の北野の

第七 江戸幕府

一 江戸の城

徳川家康 徳川家康は三河の人で、はじめは、その附近の國國を治めて、一時は秀吉と戦ひを交へたこともありましたが、のちに、秀吉に従つて小田原攻めに手ごらをたて、それまで北條氏の領地であつた、関東地方を治めることになり、武藏の江戸に城をかまへました。そのころの江戸は、葦原のつづくさびしい村だつたといふことです。

秀吉がなくなつてから、諸大名の間で、家康の勢力は目だつて強くなつてきました。秀吉の子の秀頼はまだ幼なかつたので、秀頼をまもつて、豊臣家のためにつくさうとする諸大名は、たがひに力をあはせて、家康をうたうとするはかりごとをめぐらしました。そして

ました。江戸は、このち長くわが國の政治の中心地になりました。

家康は、源頼朝が武家政治をはじめた鎌倉幕府の方針を手本にして、政治を行ひました。かうして三代將軍家光のころまでに、いろいろな制度もでき上り、幕府のもとあはしつかりしてきました。

幕府には、將軍のもとに大老・老中・若年寄といふ三つの大事な役がおかれ、老中が主として政治をとり、若年寄がこれをたすけることになつておりました。さらに、その下に神社や寺院のことをうけもつ寺社奉行、経済の仕事に當る勘定奉行、江戸の町政を取りあつかふ江戸町奉行がおかれました。また諸國の大名や旗本の武士を取りしめるために、大目付や目付の役があり、そのほか京都や大阪など重要な土地にも、それぞれ役人がおかれました。

幕府は、全國のおよそ四分の一におよぶ土地を持つておりました。これを天領といひます。政治上、また軍

て慶長五年（西暦一六〇〇年）の秋に、美濃の關原ではげしい戦ひが行はれました。ほとんど全國の大名が東西兩軍にわかれて戦ひましたが、家康のひきゐる東軍が、つひに西軍をやぶつて勝利をさめました。これを天下分け目の戦ひといひます。

西軍に加つた大名は、みな罰せられ、全國の大名がこのうち家康に従ふことになりました。

秀頼は大名の一人として、大阪城にとどまることをみとめられました。秀頼が成人してのち、豊臣家をおこして、昔の姿にもどさうとする人人は、この城によつて兵をおこしましたが、家康のためにほろぼされ、豊臣家は絶えてしまひました。

幕府の政治 徳川家康は、關原の戦ひがすんでから、ほとんど征夷大將軍に任せられて、幕府を江戸に開き

事上、大せつな都市や港は、大い大名にまかせず、幕府が自分で治めておりました。

大名の取りしめり

國國にある大名は、幕府のきびしい取りしめりをうけながら、その領地を治めておりました。幕府の定めた規則に従はない時には、領地を取りあげられたり、けづり取られたりしました。幕府は大名の配置に、とくに工夫をこらしました。徳川氏の一族と、もと家康の部下であつた大名は、おもに關東・近畿・東海道の他の重要な地方におき、はじめは徳川氏と肩をならべてゐて、のちになつて従ふやうになつた大名は、なるべく遠い不便な地方におきました。また大名がたがひにれんらくをとつて、幕府にそむいたりすることのないやうに、その領地を入りくませたり、天領をその間においたりしました。

參勤交代の制度も、また大名を取りしめる方法でした。この參勤交代といふのは、すべての大名が、やしきを江戸において、妻や子をここにとどめ、一年は國

もとに、またつぎの一年は江戸のやしきに住むやうに定めた制度であります。りつばな行列をそろへて、國もとと江戸の間を往復したり、江戸でむだの多い生活をおくつたりするために、多くの費用がかかるので、大名はかなり苦しみました。しかし幕府は、この制度によつて大名をかんたくし、おさへつけることができました。またこの制度を通して、江戸の文化が遠くの地方にまで行きわたつたといふことも考へられます。大名行列が往來するために、街道や途中の宿場などにぎやかになりました。今でも昔の街道すぢにあたつてゐる町に、そのころの本陣のやしきがのこつてゐることがあります。

士農工商 幕府は、全國の大名を取りしめるばかりでなく、ひろく、一般の人民にむかつて、いろいろなこまかいおきてをつくつて、自由にふるまふことのできないやうにしました。士・農・工・商といふ、四つの身分が、はつきり定められ、武士は、一だんと高い

たのです。

イギリスとオランダとは、早くから東洋に商船を送りたいとのぞんでゐましたが、ここにやうやくそののぞみがとどいて、それぞれ新しく貿易の會社をたて、盛んに活動をはじめました。兩國はイスパニヤやポルトガルとはり合ふため、その勢ひのあまりおよんでゐなかつたジャバ島を根據地として、附近の國國と取引を行ひました。わが國では九州の西のはてにある平戸の港に、兩國の商館がおかれましたが、この港は昔から支那との交通が、盛んなところで、ここを足がかりとして、明との貿易を開かうとしたのです。やがてイギリスの商館は、オランダとの競争にたへかねてとざされましたが、これからのち、オランダの貿易は一そう盛んになりました。

南の國國 明では、このころ外國と商賣をすること、を、かたく禁じてゐました。室町幕府のころから、支那の沿岸を荒しまはつた倭寇の群れが、明の水軍のま

身分にあるものとして、思ふままの力をふるふことができませんでした。農業が、最も大事な産業と考へられてゐましたので、農民は、武士につぐものとされてゐたのです。

幕府の力はきはめて強く、そのおきてや取りしまりはきびしかつたので、世の中のすべてのことに、先例やならはしが重んぜられ、新しい計画をたてたり、進んだ研究をしたりすることが、喜ばれないやうになりました。

二 朱印船

世界のやうす 徳川家康が江戸に幕府を開いたころ世界のやうすは、かなり變つてきてゐました。ヨーロッパで、これまで大きな勢力をふるつてゐたイスパニヤとポルトガルがやうやくおとろへ、これに代つてイギリスとオランダとが盛んになつてきました。オランダは、もとイスパニヤの領地でしたが、新しく独立し

もりがかたかつたので、しだいに南に進み、フィリピンや安南の地方に、姿をあらはすやうになつたのは、秀吉のころからです。

秀吉は、南の國國にむかつて、おどしつけるやうなやうすを見せましたが、家康は、これと反対に、たがひにしたしく交はりを結んで行かうといふ方針をとりました。そして、フィリピン・安南・シヤム・カンボチャなどの國國に手紙を送つて、わが國から渡る商船が、平和に貿易を行ふことができるやうに、はからひました。

朱印船 幕府はこれらの商船に、渡航先を明らかにした朱印狀をあたへました。この朱印狀が證明書となつて、その貿易が保護されました。これを朱印船といひます。

京都や大阪、長崎などの商人や、九州地方の大名などは、南の國國の産物を手に入れるために、年年朱印船を送りました。幕府が開かれてから、およそ三十年

の間に、その地方に渡つた朱印船の数は、三百五十隻ほどもありました。

朱印船は、おもにわが國の銀を積んで、南の國國に渡りました。その渡航先で、明の商人が本國から運んでくる生糸や絹織物を買ひとつたり、またそれらの國でとれる、染料や藥種・鹿皮・象牙などをたくさん仕入れてきました。國内の武士や商人は、先を争つてこれらの商品を手に入れようとして、費用ををしまなかつたので、朱印船の貿易による利益は、かなり大きなものでした。

船は、支那のジャンク船にいた、大がたの木造船が用ひられました。船の針路を定めるために、羅針盤や海圖もそなへつけてありました。太陽や、星の高さをはかつて、船の位置を知る方法も知られてゐました。

このやうに進んだ造船術や航海術人については、ポルトガル人や支那人から學んだところが多かつたやうです。今日つたはつてゐる朱印船の繪を見ると、大ぜい

の乗組の人人が、歌をうたつたり、かるたを取つたりして、楽しい船旅をつづけてゐたやうすがよくわかります。

日本町 朱印船が目ざして行つたフィリピンや安南・シヤムなどの港には、その取り引きの仕事にあたる日本人が、大ぜい集つて住んでゐる町ができました。これを日本町といひました。これらの人人の中には、關原や大阪の戦ひにやぶれて、徳川氏にうらみをいだきながら、國外に逃げのびた武士や、きりしたん宗の信者などもありました。

朱印船が南の國國に渡つて、わが國ではしがつてゐた数数の商品を求めてくることは、やがてオランダの利益をそこなふ結果になりました。ことにオランダが臺灣に支那貿易の根據地をきづいてからのちは、競争はいよいよはげしくなつてきました。

支倉常長 家康は、南の國國ばかりでなく、遠く太平洋をこえて、今のメキシコと貿易を開かうと計画し

ました。仙臺の大名伊達政宗が、けらいの支倉常長を使ひとして、ローマ法王のところへ送つたのも、このころのことです。政宗もまた、家康と同じやうな考へを持つてゐたのです。しかしわが國で、きりしたん宗の取りしまりが、きびしくなつてきたために、とうとうこれらの計画は行はれませんでした。

三 鎖 國

きりしたん宗 家康は、國の中の統一をはかり、また外國としたい関係を終んで、幕府のもとゐをかねて行くために、きりしたん宗の信仰を許しました。秀吉のころに、一たんときざれた教會堂も開かれ、また姿をかくしてゐた宣教師たちも、えんりよなく、その教へをひろめるやうになりました。信者の数も、また年を追うてふえて行きましたので、幕府はやがてその信仰を禁じ、宣教師や信者をきびしく取りしめることにしました。

もともとヨーロッパからつたはつた、きりしたん宗の教への中には、わが國のならはしに合はないところもありました。幕府はその信者の数が多くなつて行くにつれて、いよいよ政治が、とりにくくなることをおそれました。

ことに西日本の諸大名の間には、秀吉のころから信仰をまもつてゐたものもあつて、幕府の命令が十分に行はれず、ひいては徳川氏の地位がおびやかされる心配もあつたのです。

鎖國令 オランダは、ポルトガルやイスパニヤとはちがつたクリスト教を信じてゐたので、これらの國國の貿易を、さまたげるために、きりしたん宗のひろまることは、日本のためにならないと、幕府に申し出ました。

幕府は、きりしたん宗を禁じて、宣教師を追ひはらつたり、信者を苦しめたりしましたが、信仰はすこしもおとろへず、またひそかに、海外から渡つてくる宣

教師が絶えませんでした。そこで家光の時に、海外との交通をすべて禁止する、といふ命令を出しました。朱印船の渡航は禁せられ、また海外ではたらいでゐた日本人が、本國へ帰つてくることも許されなくなりました。大がたの船をつくることさへ、できなくなつたのです。

寛永十四年（西暦一六三七年）肥前の島原半島で、きりしたん宗を信する農民がそむいて、幕府にてむかひました。この乱は、島原や天草島の領主らの、よくない政治に苦しめられた、農民の不平からおこつたものでしたが、その勢力は、きはめて強く、十万余りの幕府の軍をむかへて、およそ五箇月の間、てむかつた末、やうやくしづまりました。平戸の商館にゐたオランダ人も、幕府の命令をうけてその攻撃に加はりしました。

島原の乱のち、幕府は、きりしたん宗の取りしまりを、一そうきびしくする一方、ますます鎖國の方針

をかたくして、それまで長崎で貿易を行つてゐたポルトガル人を、ことごとく追ひはらつてしまひました。

やがて平戸のオランダ商館が長崎にうつされましたが、オランダ以外のヨーロッパの商船は、すべて來航することを禁せられました。支那各地の商船は、このちも、年数多くこの港に出入することになりました。なほ支那では、このころ明に代つて新しく清が

鎖國によつて、海外との關係が全く断たれることになつたのは、關原の戦ひからおよそ四十年のものとであります。徳川氏の地位は、ここに動かすことのできないものになりましたが、國民は、このち世界の事情に暗くなり、また海外の文化にふれる機会を失つてしまひました。

踏繪と宗門改め 幕府は、國內でなほひそかに、きりしたん宗を信じてゐる人人を、ことごとく探し出して罰するために、賞金をかけて宣教師や信者を届け出

させたり、信者が拜む、きりしたん宗の神の像を人人に踏ませて、その神仰をしらべたりする方法をとりました。すべての人人は、かならず佛教の信者になるやうに定められ、きりしたん宗の信者でないことを、年

年寺院から役所に届け出る宗門改めといふ制度もつくられました。このやうにして、幕府はクリスト教をおそれる氣持を、人人の心の中に深く植ゑつけてしまひました。

出島 オランダの商館は、長崎の出島におかれしました。出島は、もとポルトガルの商人をおくために、きづいた埋立地であります。

毎年渡つてくるオランダ船が、ここにその商品を荷あげして國內の商人と取り引きしました。生糸や絹織物・毛織物などをはじめとして、南洋の産物もたくさん積まれてきました。そしてかへりには金・銀・銅の類や樟腦・陶器・漆器などを運んで行きました。これらの輸出品は、オランダの手でヨーロッパに送られ、

また支那をはじめ、東洋の各地に賣りさばかれたのです。

出島のオランダ人は、そこから外に出ることを許されませんでした。商館長は毎年一度、將軍にあいさつをするために、江戸に行くならはしてした。この旅行を通して、わが國の事情や風俗を知ることができたのです。その記事を書いたもので、はじめて鎖國後のわが國情が、ヨーロッパに知られるやうになりました。また幕府は、このオランダ人が年々さし出す報告を見て、世界のやうすをわづかに知ることができたのです。

問題

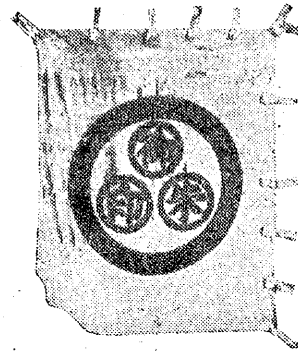
一 江戸幕府は大名を取りしめるために、どんな方法をとりましたか。

二 わが國の地圖をかいて、つぎの地名を書き入れてもらなさい。

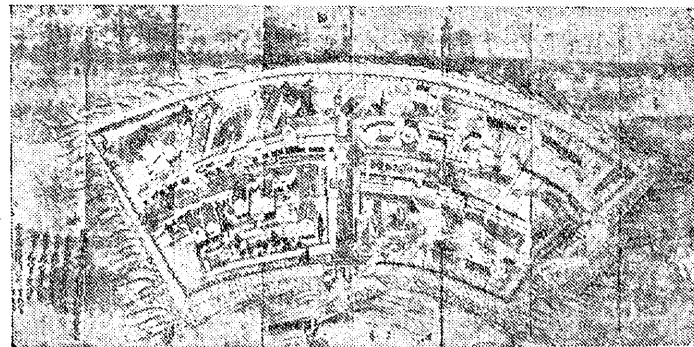
江戸 大阪 關原 長崎

三 朱印船は南の國で、どんな商品を取り引きしましたか。

四 幕府はなぜ鎖國をしたのですか。鎖國をしたことは、わが國にもつて、どんな利益になりましたか。またどんな損失になりましたか。



朱印船の旗じろし



島 田

第八 江戸と大阪

一 農村と町

武士と農民 このころ全國の大名は、それぞれ地方の大きな町に城をかまへてゐました。大名につかへる大勢の武士は、その城のまはりに住んでゐました。このやうに、武士が町に住むやうになつたのは、戦國時代からのことで、古くは武士も農村に住み、また農民もいくさの時には、武器をとつて戦つたのです。武士が農村をはなれてしまつてから、農民もいくさに出ることがなくなり、農業だけに力をつくすことになりました。

幕府は農業を一番大事な産業としてゐましたが、中でも米をつくることが重んぜられました。大名の領地はその米のとれだかで示されました、これを石高と

いひます。そして大名につかへる武士は、俵祿として受ける米でくらしをたててゐたのです。したがつて農民が米をつくるという仕事は、町に住む武士の生活と結びついた大せつなことでありました。

幕府をはじめ全國の大名は農業をすすめました。荒れた土地を開いたり、海岸の沼地を埋め立てたりして田や畠がすつとふえるやうになりました。また支那や南の國國からめずらしい植物がつたはり、作物の種類も増してきました。さつまいも・かぼちや・たばこなどは、このころはじめてわが國に知られた作物です。さつまいもは支那が原産地ですが、琉球をへて薩摩につたへられたので、さつまいもとよばれてゐます、かぼちやはインド支那のカンボチャの國から渡つてきたものです。また、たばこは家康の時にフィリピンから

つたはりました。

農村のすがた このころの農村は自治を許されておりました。農民の上に立つて、村を治める役目を、庄屋とか名主とかよんでおりました。今の村長にあたる仕事です。

農民は村にわりあてられる年貢を、たがひにわけて納めなければなりません。五人組といふ制度があつて、五軒の家が集つて一組となり、毎日の仕事やくらしの上でたがひに助けあひ、また、責任を持ちあふしくみになつておりました。幕府がこの五人組の制度をつくつたのは、一つには、きりしたん宗の信者を取りしめるためと年貢をよくをさめさせるためでありました。

農民は武士につぐ身分とはいへ、商業や工業に従ふ人人にくらべて、はるかに低いくらしをしておりました。幕府は、農民のくらし方についてこまかくしづし、またいろいろな制限を加へ、なるべく高いくらしをし

の背に乗せたり、船に積んだりして遠くの町へ運び、港から港へ送ることも、盛んに行はれておりました。鎖國の制度が定められて、海外の國と貿易を行ふことができなくなつてからは、ますます國內の商業が盛んになることになりました。

日本海にそつた地方から、太平洋岸や、瀬戸内海方面の地方へ、たくさんの商品を送るために、沿岸の航路が開かれるやうになつたのも、このころのことです。そして江戸と大阪は、最も開けたりつばな都市になりました。

二 元祿のころ

元祿風 鎖國ののち、國の中はいくさもなく、おだやかな年がつづきました。將軍をはじめ、江戸に集つてくる諸大名や、その下につかへる武士が、しだいに武ばつたことをきらつて、せいたくなくくらしを好み、遊びにふけるやうになりました。

ないやうにはかりました。農民は自分でつくる米を食べることもできず。絹の着物をきることも許されません。りつばな家に住むことはもちろん、馬に乗ることさへ禁ぜられておりました。このやうにして農民は低いくらしをして、一年中その仕事にせいを出してゐたのです。

町人 町人といふのは、商業や工業に従つてゐる人をさした言葉です。武士は、農業をとくに重んじてゐたため、町人をいやしめておりました。中でも商人は樂なくくらしをして、利益をむさぼつてゐるといへ、身分は最も低いものにされておりました。しかし、商人の中には、多くの財産をたくはへて、かへつて大名よりも、高いくらしをしてゐた人人がたくさんありました。

商人は城下町や港町などに集つて、たがひに組合をつくり、強い勢力を持つておりました。大きな店が軒をならべ、またにぎやかな市場も立ちました。商品を馬

元祿のころ、世の中の風俗はきはめてはでな、はなやかなものになりました。きれいな衣裳や帯が用ひられ、髪かたちや、けしやうにも工夫がこらされました。そのほか部屋のかざりや、道具の類などもせいたくなものがありました。

歌舞伎芝居や人形浄瑠璃が、盛んになつたのはこのころでした。大阪の近松門左衛門は多くのりつばな浄瑠璃をつくりました。

このやうな町人や武士の生活をかいた小説も行はれましたが、井原西鶴の作品はことにすぐれてゐます。他方に、またこのはなやかな、あわただしい世の中に、しづかな落ちついた心持をあらはした俳諧が生まれました。松尾芭蕉は、名高い俳句をたくさんこのこしてゐます。

俳句は十七字からなる短い詩ですが、これと似た形のものに川柳があります。川柳は俳句よりもすつとおくれてはやるやうになりました。川柳は世間の人人の、

ありのままの姿や細かい氣持を、面白くうつし出したものです。

わが國の繪の中で、ひろく世界に知られてゐる浮世繪は、元祿のころから、すぐれたものができるやうになりました。浮世繪といふ名は、楽しい世の姿をうつし出した繪といふ意味です。そのころの人に大そう喜ばれたので、版画にしてたくさん賣りひろめられたのです。のちには色を多く用ひた、きれいな版画ができました。安藤廣重が、東海道五十三次の宿場をかいだ繪はことに有名です。

元祿のころ、富み榮えた江戸や大阪の町人の間に生まれた、このやうな明るい風俗を、元祿風と呼んでゐます。今でも元祿模様や元祿袖などといつて、その名がのこつてゐます。また折り紙や道中すご六などの楽しい遊びも、このころにはじまつたものだといふことです。

徳川と貨幣 戦國時代に、國國の大名が、その領分り方がまちがつてゐたことに氣づいて、もとのやうな質のよい貨幣を、通用させなければならぬといふ意見をのべました。白石は、幕府の經濟がゆたかでなくなつた原因を、外國貿易によつて、わが國の金や銀が海外にたくさん流れ出たためであるといひ、それをおさへるには、年年長崎にくる外國の商船の数を定め、また輸入する商品を少くしなければならぬと説きました。

そこで幕府は、白石の言葉にもとづいて、長崎の貿易を制限することになりました。白石は、經濟のことばかりでなく、そのころあまり知られてゐなかつた世界の事情を、くはしくしらべたり、また、わが國の古い歴史や言葉について研究した、すぐれた學者であります。

徳川吉宗 八代將軍吉宗は、おとろへかけた幕府をたてなほすことに力をつくしました。

吉宗は、元祿のころから、あまりせいたくになつた

にある鑛山を盛んにほつたので、その技術は大そう進みました。支那やヨーロッパの進んだ技術もと入れられたのです。家康は、大きな鑛山をすべて幕府のものにして、金や銀を多く手に入れることをはかりました。佐渡の金山や石見の銀山などがおもなものです。幕府は、その金や銀を用ひて、貨幣をつくり、全國に通用させてゐました。慶長年間にできた大判・小判は、ことにりつばなものであります。

元祿年中に、幕府はこれまで用ひられてゐた、質のよい貨幣をいなし、よくないものをたくさんつくりました。これは、町人の富の力によつて、世の中がしだいにはなやかになるにつれて、幕府の物いりが多くなり、年年のきまつた収入だけでは、支へきれないやうになつてきたためです。しかし貨幣の質を悪くしたために、かへつて物價が高くなつて、貧しい人人を苦しめました。

このころ、幕府につかへた學者新井白石は、このや世の中の氣分をひきしめ、不足がちな幕府の財政をもとのやうにゆたかにするために、むだづかひをしない、質素なぐらし方をすすめました。そしてひろく世間の人人が、自由に政治上の意見をのべ、將軍にむかつて、思ふとほりのことを訴へることができるようになり、目安箱の制度をつくり、また大岡忠相を江戸町奉行にとり立てて、正しい裁判を行はせました。忠相が、いろいろこみいつた事件をたくみにさばいた話は、世の中にひろくつたはり、物語となつてたくさんこのころにゐます。

一方吉宗は、産業をおこすことが何よりも大せつであると考えて、國國の土地をしらべ、新しく田や畠を開き、米のとれたかを、ふやすことに骨を折りました。また、ききんの年にそなへるために、さつまいもを各地に植ゑさせたり、さとうきびから砂糖をとることを、研究させたりしました。青木昆陽は吉宗の言ひつけをうけて、さつまいもの種を薩摩から取りよせて、江戸

小石川にある幕府の薬園に植ゑました。それで昆陽のことを、人人は甘諸先生と呼びました。

將軍が先に立つて、このやうな仕事をしたので、諸大名も、みなその領内の産業をおこすことに力をそそぎました。

鹿兒島縣のたばこ、群馬縣や長野縣の養蚕業、四國や中國地方の塩などは今日大せつな産業になつてゐますが、これらはみな、このころから盛んになつたものです。

三 學問の道

儒教と寺子屋 家康は、幕府をたてた時から、儒教の教へによつて、世の中を治めて行く方針をとりました。そして儒者の林羅山を重く用ひて政治を行ひ、書物を多く集めたり、銅の活字を使つて、支那の古い本を出版したりしました。この活版の技術は、秀吉のころに、はじめてわが國に知られたものであります。そして、また一人一人師匠の前に出て、いろいろな本の読み方を習ひました。

國學 儒教が盛んに行はれるにつれて、すべてのものごとを見て行く上に、昔の學者の意見にとらはれず、ちかちかのものについて考へてみるといふ、學問の道が開かれるやうになつてきました。

わが國の大昔の言葉や、歴史を明らかにすることに志す學者が出てきました。これらの人人は、萬葉集や古事記の研究を盛んに行ひ、儒教や佛教がまだたはつてこない時代の、わが國の姿を知らうとつとめました。これを國學といひます。伊勢松坂の本居宣長は、一生かかつて、古事記を研究し、古事記傳をあらはしました。

昔の人人が書きのこしたものは、たとへわづかなものでも、そのころの世のありさまを知る、大せつな材料になります。宣長と、同じころの學者、堀保己一は、昔の本を多くあつめて、群書類從といふ名をつ

ののも儒教は大そう盛んになりました。近江聖人といはれた中江藤樹や、京都の伊藤仁齋、江戸の荻生徂徠など、それぞれすぐれた説を立てました。これらの學者は、その研究にあたつて、とかく支那を崇拜する傾きがありましたが、山崎闇斎と山鹿素行は、神道と結びついた説を新しくのべました。

また儒教をもとにして、一般の人人に、わかりやすい教へをのべた貝原益軒や、心學といつて儒教に神道や佛教の教へをまぜて、面白く説くことをはじめた石田梅巖や、農民の道を説いた二宮尊徳なども有名であります。

儒教の教へをひろく學ばせるために、幕府では昌平坂に學問所を設けましたが、地方の藩でも藩學をおいて、武士の少年たちを教へました。

町でも農村でも、子供たちは寺小屋に通つて、讀み書きを學びました。ざしきの正面に机をおいた師匠の前に、小さな机をならべて、おとなしく手習ひをしたけ、版にして、失はれないやうにしました。また、水戸の大名徳川光圀は、けらいにいひつけて、全國から、歴史の材料となる古い本や書きものを集めたり、うつさせたりして、長い間かかつて大日本史をつくらせました。

蘭學 ポルトガル人が、わが國と、交通してゐたころには、いろいろ新しいヨーロッパの知識が、つたはつてきましたが、家光の時に、鎖國令が出てからのちは、國民は、しだいに外國の事情がわからなくなりました。

しかし、ものごとを深く知らうとする氣持が學者の間に高まつて行くにつれて、オランダの言葉を學び、それによつてヨーロッパの文明にふれたいと考へる學者が、多くなつてきました。

このころまで、支那の船が積んでくる本の中で、ヨーロッパのことについて書いてあるものは、一さい輸入することを禁せられてゐましたが、吉宗は、クリス

ト教に關係のないものは許す方針をとりました。吉宗はヨーロッパの學問が大そう好きでしたが、その中でも天文や曆に興味をもつて、太陽や星を觀測するきかいを作つたこともありました。吉宗は青木昆陽にいひつけて、オランダ語を習はせました。

そのうちオランダの醫學を學ぼうとする熱心な學者が出るやうになりました。前野良澤は長崎に行き、オランダ語を學び、また醫學の本を手に入れました。杉田玄白は良澤と一しよに、ある日江戸の小塚原の刑場で、罪人のからだを解ぼうして、醫學の本にのつてゐる解ぼうの圖が、正しいことに感心しました。それからオランダ語の研究を進めて、オランダの本をほんやくし、とうとう解體新書といふ解ぼうの本をあらはしました。

そのころオランダの學問を蘭學と呼び、これを學ぶ學者を蘭學者といひました。蘭學者は、多く医者出身で、ヨーロッパの進んだ醫學を、わが國にとり入れようとして、ヨーロッパ風の兵式教練などが行はれることになりました。

鎖國のために、一般の人人は、海外のやうすがわからず、またヨーロッパの科學についても、よく知りませんでした。しかし、幕府は、このやうにすすんで蘭學をとり入れ、蘭學者を用ひ、またいつも、オランダ人を通して、世界の事情を知ることにとめてゐたのです。

問題

一 つぎのことからについて知つてゐることをいつてごらんなさい。

天領 本陣 五人組 士農工商 川柳 心學

二 身分の低い町人が、だんだん大きな力を持つやうになつたのはなぜですか。

ることに力をつくしました。

出島の商館員の中にも、すぐれた医者がゐて、これらの蘭學者をよく教へたので、外科や内科をはじめ、いろいろな方面の醫學の知識や技術がひろまるやうになりました。

醫學と關係の深い植物學や化學も、オランダの本を通してはいつてきました。また、幕府の天文の仕事をするやうなことをする人人は、天文や曆の學問を、オランダの本によつて學び、わからないことがあれば、年々、將軍にあいさつをするために、江戸にくるオランダ人に聞いたといふことです。天文学とならんで、地理の學問や測量の方法などもつたはりました。伊能忠敬は、幕府の命令を受けた、年をとつた身で、國國を歩きまはつて、正確な測量を行ひ、りつばな地圖をつくりました。

そのほか砲術や兵學についての知識も、盛んにとり入れられました。そしての中には大砲をつくることや、三 大岡さばきのお話を知つてゐたら、おたがひに發表しあひませう。

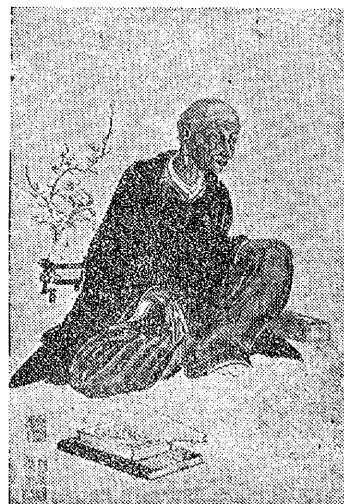
四 つぎの人人は、どんなことをしたので有名ですか。

松尾芭蕉 本居宣長 杉田玄白
安藤廣重 二宮尊徳 新井白石

五 鎖國をしたのち、海外の事情は、どこからどのやうにして、わが國にはいつてきましたか。また、それをつたへたのはおもにどこの人でしたか。



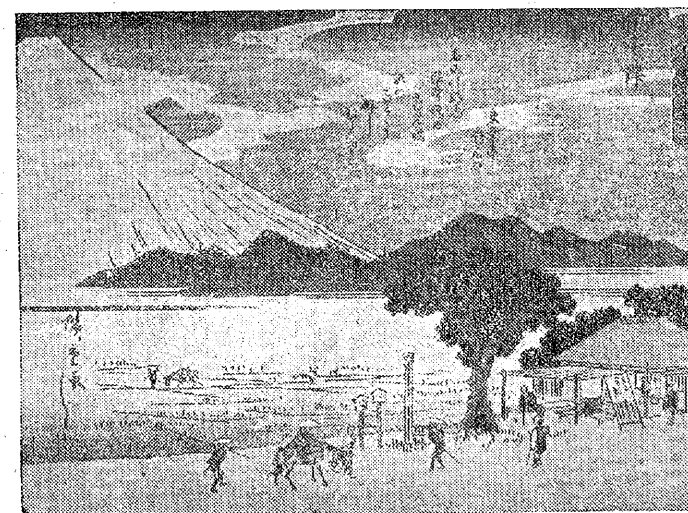
寺子屋



杉田玄白と解體新書



浮世繪 (一)



浮世繪 (二)

第九幕 府の衰亡

一 世界の動き

ヨーロッパの國 長い間の鎖國によつて、國の中は平和がつづいてゐました。その間にヨーロッパでは、これまで東洋の各地と貿易を行ひ、大きな勢力を持つてゐたオランダがとろへ、イギリスが新しい工業國として盛んになつてきました。イギリスの商船はインドを根據地にして、支那の港にも出入するやうになりました。イギリスから獨立して、大陸に國をたてたアメリカ合衆國は、やがて太平洋岸の地方をあはせ、さらに遠く海をこえて、支那と通商するやうになりました。この太平洋の航路には、新しく發明された汽船が帆船に代つて用ひられてゐました。またこのころから北太平洋方面に、活やくしはじめたイギリスやアメ

リカの捕鯨船が、時時わが近海に姿を見せるやうになりました。

シベリヤから千島列島の方面にかけては、ロシアの勢力がのびてきてゐました。この地方には、てん・らつこなどがたくさんすんでゐて、その毛皮はヨーロッパの人人に大そう喜ばれ、價の高いものとされてゐました。ロシア人がだんだんと東洋へ進んできたのは、一つにはその毛皮を手にいれるためだつたといはれてゐます。

これらの國國にとつて、わが國が國をとざして、まったく外國の船を、近づけようとしなないことは、何かと不便なことでありました。またわが國と貿易を開きたいといふのぞみも強かつたので、やがて幕府にむかつて、せひ國を開いて貿易を許してほしいと、申し出

るやうになりました。

蝦夷地とロシア人 そのころ北海道は松前藩の領地で、蝦夷地と呼ばれてゐました。しかしこの方面には、まだ日本人も少なく、またその附近の地理は十分に知られてゐなかつたのです。十一代將軍家齊の時、寛政四年（西暦一七九二年）に、はじめてロシアの使ひが松前に來て、幕府に貿易を開きたいと申し出ました。けれども幕府はこれを許しませんでした。この時、使ひは、その船にわが國の漂流民を乗せて送りかへしてきました。この漂流民は、ロシアで大事にされ、長い間方方を見物してきたので、學者はそのみやげ話を聞いて、はじめてロシアの事情をくはしく知ることができました。

このうち、幕府では松前奉行をおいて、ちかに蝦夷地を治めることにしました。また間宮林藏が幕府の命令で、はじめて樺太の探検を行つたのも、このころのことです。樺太は、この時まで大陸と地つつきの半島

であると思はれてゐましたが、林藏は、實地にしらべた上で、島であることを明らかにしました。この島と大陸との間の海峡は、今日、間宮海峡と呼ばれてゐます。

イギリスとオランダ 幕府は、これらの外國の船がしきりに近海にあらはれるやうになつたので、沿岸のまもりをきびしくしてゐましたが、文政八年（西暦一八二五年）には海岸に近づく外國の船は、たとへ、どのやうな事情があつても、かならず大砲をうちかけて追ひはらふやう、諸大名に命令しました。のちに蘭學者の渡邊崋山や高野長英は、このやうな方針が、世界の事情を知らない無理なものであるといつて、反対したために罰せられました。これは天保十年（西暦一八三九年）のことです。

ちやうど、この年に、清國では、インドの阿片を輸入することがもとなつて、イギリスと戦ひを開きました。その結果、清國がやぶれて、香港をゆづり渡

し、天津や、廣東などの港を開くことになつて和ぼくしました。この阿片戦争のことを、つたへ聞いた幕府では、大そう心配して、外國の船をうちほらふ命令を、いくぶんゆるやかにすることにきめました。しかし、鎖國は先祖の代からずつとまもつてきたことであるといつて、改めようとはしませんでした。

またオランダの國王から使ひがきて、幕府に、早く國を開くやうにとすすめてきた時にも、幕府はそのすすめに従ひませんでした。

幕府が、このやうに、昔からの鎖國の方針をかくまもつてゐる間に、東洋のほかの國は、年を追うてヨーロッパの國國としたしくなつて行きました。わが國だけが、この大きな流れの中に、とりのこされてゐることはできなくなつてきました。

二 町人の力

武士と町人 江戸や大阪をはじめとして、大きな都市に武士が集り、せいたくなくらしをするやうになつてから、武士はその高い身分にもかかはらず、町人のために、しだいに苦しめられることになりました。もともと武士は町人をいやしめ、貨幣をかるく見てゐました。しかし、くらしむきがはでになるにつれて、物いりが多くなり、どうしても、その俸祿の米を、貨幣にかへるより外はありませんでした。そのために、全國の大名は國もとから江戸や大阪に、米やそのほかの産物を送つて、これを町人の手に渡すことがふつうになつてゐました。貨幣を自由に取りあつかつてゐる町人は、かうして武士の勢力にとつて代つて、いつの間にか世の中を實際に動かして行く、大きな力となつて行きました。

幕府は、このやうな世の中を、変へようとして、力をつくしました。寛政年間に、老中となつた松平定信は、せいたくをいまして、質素なくらしをすること

を、すすめました。また諸大名に命じて、ききんの年に、そなへるために、もみを貯へさせたり、また、ごく貧しい人人を救ふ制度をつくつたりしました。今日の養老院は、この時の制度が長くのこつたものであります。

定信の骨折りもそのかひがなく、定信が退いたのは、またせいたくな氣分が年を追うて高まり、武士はますますくらしに困つてきました。天保のころに、老中となつた水野忠邦は、一そうきびしいやり方で、町人の力をおさへようしました。こののち、こみいつた外交の問題がおこつてきたために、幕府は海岸のそなへをかたくしたり、軍艦を用意したりすることに、たくさんの方費をつかひ、財政はますます苦しくなつてきました。

このやうに行きづまつた世の中を、すつかり改めるために、幕府を倒して、政治の中心を、朝廷にうつさうとする人人が、やうやく多くなつてきました。藩か

らはなれた浪士たちの間にも、ひそかに京都の公家のもとに出入して、その相談をするものが少くありませんでした。

農村のおとろへ 農村は年貢の高がますます多くな

つて行くために、一そう暮しくなつてゐました。先祖の時から受けついできた田や畠をすてて、ほかの土地ににげて行つたり、町に出て働いたりする人たちもたくさんありました。また天災やききんが、たびたびおこつて人人を苦しめました。天明年間には、ことにはげしいききんがありました。幕府をはじめ諸國の大名は、農民をうゑ死から救ふためにいろいろ骨を折りました。

このやうにして、農村はだんだんおとろへ、その人口はへり、田や畠は荒れてしまひました。その上、これまで町人の力があまり及んでゐなかつた農村にも、やがてその力が加はつてくるやうになりました。農民が毎日のせはしい仕事のひまに、機を織つたり、紙を

すいたりしても、その働きから得た収入が、いつのまにか町人の手に渡つてしまふのでした。

農村がとおろへるやうになると、農民の氣持も、ずさんできました。また、農民の上に立つ武士も、前はどの威勢がなくなつてきました。士・農・工・商といふ身分のちがひも、ただ、名前だけになつてしまひました。

學者の間には、農業をたてなほし、經濟の組み立てをかへて、新しい世の中をつくらうといふ意見を示した人人もありました。佐藤信淵は、ひろく諸國の事情をしらべて、農業の改革を説き、また外國の例をひいて、國を富ますためには産業をおこして、交易を盛んにしなければならぬといふべしました。

三 開 國

神奈川條約 アメリカは、清國と通商條約を結んでから、間もなく嘉永六年(西曆一八五三年)提督ペリー

しい機械をはじめ見て、すぐれた科學の力に大そうおどろいたといふことです。

日米通商條約 安政元年(西曆一八五四年)幕府はペリーと神奈川條約を結んだのちに、イギリス・ロシア・オランダの三國とも、大たい同じやうな條約を結びました。そのころアメリカから総領事ハリスが來朝しました。世界の大勢を説いて、早く國を開き通商貿易をはじめるやうに、すすめましたので、幕府もその方針をとるようになりました。老中堀田正睦は、ハリスと相談の上、條約文の下書をつくつて京都に行き、勅許を願ひましたが、このころ攘夷となへて開港に反対するものが多く、朝廷もその説に傾いてゐたので許されませんでした。

そのうち、大老となつた井伊直弼は、安政五年(西曆一八五八年)に、勅許をまたずに、アメリカと條約を結んで、新たに神奈川・兵庫・長崎・新潟の四つの港を開く、といふ約束をきめてしまひました。つづい

を、わが國に送つて港を開き、通商を行ひたいと申し出てきました。これは、一つには太平洋を往復する汽船のために、日本の港に石炭を貯へておく場所がほしかつたのです。相模の浦賀で、その手紙を受けとつた幕府では、返事をつきの年までのばすことにしたので、ペリーは一まづ浦賀を去つて行きました。幕府はこのことを京都の朝廷に知らせ、また國を開くことについて、諸大名の意見も聞くことにしました。これまでも何事につけても、すべて幕府だけでとりきめてゐたしきたりが、ここでやぶれて、幕府の威光はやうやく失はれ、大名もそれぞれ思ふままのことを言ひ出すやうになりました。水戸藩の徳川齊昭をはじめ、攘夷となへるものが多かつたのに、翌年ペリーが神奈川に來た時、幕府は和親條約を結んで、下田と函館の二つの港を開くことを約束しました。

ペリーが幕府におくつた物の中に、電信機や汽車などの模倣がありました。わが國の人人は、このめづら

で、オランダ・ロシア・イギリス・フランスの四國とも、同じやうな條約を結びました。寛永の鎖國令からおよそ二百二十年の間、海外の國と交際を絶つてゐたわが國が、ここにはじめて、國を開くことになつたのです。

開國の影響 開國の方針が定まり、外國貿易がはじまると、これらの港は、にはかにぎやかになりました。そして、生糸や茶などが、盛んに輸出されるやうになりました。外國から買ひ入れる品としては、綿織物や、毛織物などがありました。その額はわづかなものでした。貿易にあつた商人たちは、大そう利益をうけました。しかし國內では物價がますます高くなつて、武士をはじめ一般の人人は、一そう暮しくくなつてきました。幕府が國を開いたために、生活がこんなに苦しくなつてきたのだといふ考へを起すものがあり、やがて幕府を倒し、前のやうに外國船をさいい近づけまいとする動きが、活ばつになつてきました。

幕府は、このやうな國內のさわぎをおさへることができなかつた上に、外交の方針についても自信がなく、朝廷のさしづをあふいだのです。

薩州藩・長州藩・土州藩など、西日本の大名らは、

もともと、徳川氏とは、縁がうすい間がらにありましたが、幕府の力が、おとろへるやうになると、朝廷にある、三條實美らの公家と交はつて、政治の仕組みをかへるために、大きなはたらきを、するやうになりました。

下關の砲撃 長州藩では、早く攘夷を実行するやう、朝廷を動かして、幕府は勅命をうけて、その期日を

決めました。その日から長州藩では、下關海峡を通る外國船を砲撃しました。このことは、外交の上で、大きな問題をひきおこしましたが、そのつぎの年、元治元年（西暦一八六四年）にアメリカ・イギリス・フランス・オランダの聯合艦隊は、下關に砲撃を加へ、長州藩をさんざんにやぶりました。薩州藩でも、このこ

した。

幕府では、長州藩をうつために、二回にわたつて兵を送りました。しかし薩州藩をはじめ、幕府の命令に従はない藩があつたばかりでなく、幕府の軍隊も弱くて、なかなか長州藩をやぶることができませんでした。この戦ひの最中に、慶應二年（西暦一八六六年）將軍家茂がなくなりました。つづいて、孝明天皇がおかくれになり、明治天皇が、御年十六才で即位されました。

ここに長州征伐の軍隊は、とかれることになりましたが、この戦ひによつて、幕府が実力を持たないことが、明らかになつたので、國の中には幕府を倒して、新しい、よい世の中をつくらうといふ氣持が、一そう高まるやうになりました。

幕府の滅亡 薩州藩では、これまで朝廷と幕府の間を結びつけて、おだやかに政治の改革を行はうといふ意見で進んでゐました。しかし幕府が、たうてい、た

ろ、イギリス人を殺したことがもとになつて、イギリスの軍艦から砲撃をうけたことがありました。このうち、薩州藩でも、長州藩でも開國の方針に傾くやうになりました。

イギリスは、日本との貿易で、他の國國よりも、大きな取り引きをしてゐましたが、幕府が、実力を持つてゐないことを知り、これまで、幕府としたしくしてゐた方針を変へて、朝廷を政治の中心にたてようとする、薩州藩や長州藩と、したしくするやうになりました。

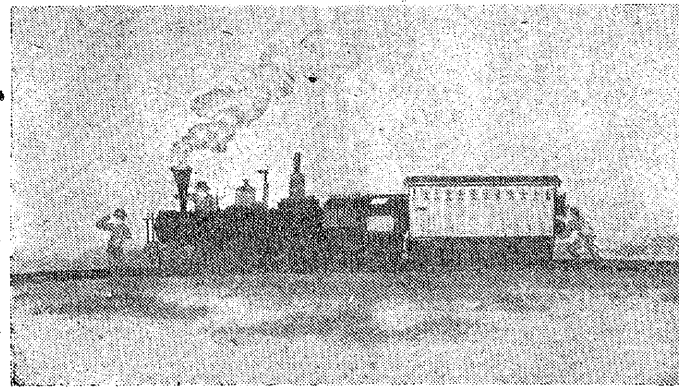
長州征伐 長州藩は、はじめ朝廷の中で大きな勢力を持つてゐましたが、孝明天皇は、その運動があまりはげしすぎることを、好まれなかつたので、おだやかな薩州藩の意見をお用ひになつて、元治元年、長州藩を京都からお退けになり、三條實美らの公家の參内をとめられました。そのうち長州の藩士らは、京都に入らうとして、薩州や會津などの諸藩と戦ひをまじへま

よりにならないことを知つてから、幕府を倒す運動をおこすやうになりました。この運動の中心になつたのは西郷隆盛・大久保利通らでありました。朝廷では岩倉具視らの公家がこれに加はり、また長州藩の木戸孝允も、この人人と一しよに、そのはかりごとにあづかつてゐました。

幕府も世の中の大きな動きにさからつて行くことはできませんでした。このころ、土州藩の後藤象二郎は、政治の中心を幕府から朝廷にうつさうと考へましたが、十五代將軍となつた徳川慶喜は、同藩の前藩主山内豊信のすすめを聞き入れて、このことを朝廷に申し出ました。これは慶應三年（西暦一八六七年）のことです。家康が將軍となつてから、およそ二百六十年たちました。ここに幕府ははろびで、新しい明治の代となりました。

問題

- 一 地圖を見て、間宮海峡がどこにあるか、しらべてもらなさい。
- 二 このころ農村がだんだんおとろへるやうになつたのはなぜですか。
- 三 幕府が國を開くまでに、外國との間にどんなことがありましたか。
- 四 わが國が鎖國をしてゐた間に、世界のやうすはどんな風に変わりましたか。またどのやうなことが発見され、發明されたか、しらべてみませう。
- 五 なぜ幕府はほろびたのでせう。幕府を倒す運動に加はつたおもな藩はどこですか。



ベリーの汽車

第十 明治の維新

一 新政の成り立ち

新しい政治 幕府がほろび、政治の中心は朝廷にうつりましたが、新しい政治をはじめるとは、まだたやすいことではありませんでした。岩倉具視らは、幕府のやり方に満足しないで、どこまでも幕府の力をねこそぎなくし、また朝廷の制度をすっかり改めようと思いました。そこで、はかりごとをめぐらして、慶應三年十二月に、大改革を行いました。

まづ攝政・関白などの制度を廃し、つぎに征夷大將軍をやめて、ふたたび武家政治がおこらないやうにしました。新たに總裁・議定・參與の三職をおき、やがて太政官をはじめ、新しくいろいろの役所をつくることにしました。これを王政復古といひます。

五箇條の御誓文 かうして政治のもとができたので、明治元年（西暦一八六八年）三月に、天皇は、親しく新政の方針をお誓ひになりました。

- 一 廣く會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スベシ。
 - 一 上下心ヲ一ニシテ、盛ニ經綸ヲ行フベシ。
 - 一 官武一途庶民ニ至ル迄、各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメン事ヲ要ス。
 - 一 舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ。
 - 一 智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ。
- これを五箇條の御誓文といひます。

さうして、諸外國とましますしたしくするため、王政復古のことを、各國に告げ、また國民にむかつて、これからは外國とあつく交はらなければならなにとさとししました。これまでは外交の方針が定まらな

つたので、いろいろめんだうなことがおこりましたが、政府は外國と手をにぎつて、そのよいものを取り入れ、國の發達をはからうとしました。

東京の都 京都が、都となつてから千年あまりになります。政治を新しくするためには、まづ、人人の氣持を変へなければなりません。それには、都をうつすのがよいといふことになりました。そして、大阪がよからうといふ人もありましたが、そののも、江戸にうつすことにきまりました。そこで、江戸を、東京と改め、まづ、東京に行幸がありました。やがて、皇居もここにうつされ、東京が、日本の都になつたのであります。

天皇は、八月に京都の紫宸殿で、即位の禮をおあげになり、年号を明治と改めて、一世一元の制をお立てになりました。

江戸城の明け渡し 幕府がほろびた時、朝廷は、慶喜の官職や幕府の領地を渡すやうに命じました。とこ

で、六月にはこれを許し、なほしばらくもとの大名を知事として、それぞれ、もとの領地を治めさせることにしました。

明治四年（西暦一八七一年）七月には、いよいよ藩を廢して、縣をおくことになりました。これで大名は、まったく領地からはなれることになりました。

藩がなくなつたので、政府は全國を統一し、一まづ維新の目的をとげることができました。そこで制度を改め、太政官を正院・左院・右院の三院に分け、太政大臣、左・右大臣、參議の三職をおきました。太政大臣は、今の内閣總理大臣にあたり、三條實美がこれに任せられました。このほか神祇・外務・大藏・兵部・文部・工部・司法・宮内の八省を定め、各省のかしらには、卿をおきました。

昔からの武士はもうなくなつてゐますので、國をまもるためには、兵隊を必要としました。そこで、鎮臺をおき、御親兵をもうけ、明治五年（西暦一八七二年）

ろが、幕府のもとのけらいや、會津・桑名などの諸藩は、これを不平に思つて、明治元年の正月に、鳥羽・伏見の戦ひをおこしました。このさわざは、江戸から東北地方にひろがり、函館にまでおよび、しばらくいくさがつづきました。しかし慶喜は、このころ江戸に帰つてきんしんし、江戸城を明け渡しましたので、朝廷は慶喜をゆるし、徳川の家を静岡にうつして、七十万石の大名としました。

維新の政治 幕府はほろびましたが、まだ各地には大名がゐて、もとの通り領内を治めてゐました。國內を一つにまとめるためには、大名をやめさせなければなりません。そこで木戸孝允は、大久保利通と相談して、大名の領地を朝廷にひき渡すやうにしました。多くの大名もこれをのぞんでゐましたので、明治二年（西暦一八六九年）の正月に、まづ薩州・長州・土州・佐賀の四藩主がそろつて、領地をさし出すことを申し出ました。ほかの諸藩もつぎつぎにこれになつたの

には徴兵令をして、國民はみな兵役につくことになりました。

二 新しい社會へ

いろいろの改革 江戸時代には、國民の中に、身分や職業によつて、きびしい上下の區別がありました。明治となつて、これをやめて、ただ華族・士族・平民の三つとしました。これも昔の身分とはちがつて、國民としては、みんな同じやうな取りあひを受けけるのです。これをこのころ四民平等といひました。そしてそれぞれすきな仕事につくことができるやうになりました。

かうして、政府は、國民の身の上を、自由にしようとしてしました。しかし、世のうつり変りのために、出世をした人もあれば、おちぶれた人もありました。士族の中には、職を失つて、こまるものが、たくさん出てきました。

このほかにも、つぎつぎと、いろいろの改革が行はれました。江戸時代には、農業が、國の本といはれ、田や畠は、自由に賣り買ひすることが、許されませんでした。政府はこれを許し、また金銭で税を出すことにしました。田や畠の税は、大せつな國の財政のもとでしたから、この改革のために、つがふがよくなりました。

貨幣や紙幣もみだれてゐました。昔の大判・小判や銅銭などでは、いろいろ不便が多かつたので、これらすべてをやめて、新しい貨幣や紙幣をつくり、「圓」を單位と決めました。これで賣り買ひや、貿易も大そう便利になりました。

江戸時代の交通は、まことに不自由でした。乗りものも馬やかごぐらゐで、旅をするにも長い日数がかかりました。明治となつてから、汽車が通り、汽船が通ひ、そのほか馬車や人力車などもできて、誰でも自由に早く行けるやうになりました。

来につかはした時に、外國の産業のありさまを、くはしくしらべさせました。

また工部省のはかに、新たに内務省や農商務省を置いて、産業の發達に力をいれました。政府がさきに立つて、農業や牧畜、その他製糸業・紡績業・鑛山業などをおこし、牧場や工場をつくりました。

これらの産業は、みな西洋の進んだ技術を學んだもので、多くの人人が西洋に行つて、いろいろ熱心にしらべたり、また外國の技師がきて、これを教へたりしました。

農業の技術も新しく西洋からとり入れました。かやうに、産業がはかに進歩したのは、政府の保護によるものです。それから民間でもこれにならつて、産業をおこすやうになりました。國內の産業が發達するにつれて、外國との貿易も盛んになりました。このころは、おもに生糸や茶を輸出し、綿・砂糖などを輸入しました。

東京・横濱間の鉄道は、明治五年に開通しました。これが日本で一ばん早くできた鉄道であります。東海道線が全部開通したのは、明治二十二年（西曆一八八九年）のことです。

鎖國の時代には、大きな船をつくることが許されませんでした。が、國を開いたころから、これも許され、だんだん汽船もつくられるやうになりました。明治となつてからは汽船會社ができて、海上の交通も開けてきました。

政府は、また郵便の制度を定め、誰でも、らくに通信ができるやうにしました。郵便切手や、はがきのできたのも、このころのことです。郵便とともに、電信もできましたが、この便利なものも、はじめは多くの人人にふしぎに思はれたほです。このほか、いろいろの會社や銀行などもできてきました。

新しい産業 國を富ますためには、産業をおこす必要があります。政府は、明治四年に、岩倉具視らを歐

三 文化の動き

教育 政治や経済とならんで、文化もまた變つてきました。江戸時代にも、オランダの本などによつて、西洋の學問や文化がたはつてゐましたが、開國となつてからは、一そう盛んになりました。明治のはじめごろは、おもにアメリカやイギリスのものが、多くとり入れられ、つづいてフランス・ドイツのものがはいつてきました。

政府は教育のことに大そう力を入れました。明治五年には「學制」を定めて、小學・中學・大學などの學校の制度をたてました。教育の大せつなことをこまごまとさとし、國民が一人のこらず、教育をうけるやうにすすめました。ことに、女子の教育のために女學校をおこしました。かうして、女性をいやしめる昔からのならしが改まるやうになつてきました。教育もまた四民平等となつたのです。やがて東京には大學がた

てられ、地方には、たくさん的小學校や中學校ができました。

教育のことで、手がらのあつた人に、福澤諭吉・田中不二鷹^{ふたけ}が^{なかにふたけ}あります。ことに、福澤は學校をたてたり、たくさんの本を書いたりして人人を教へました。またアメリカからは、マレーがきていろいろ力をつくしました。

學問と宗教 このころに、西洋から、學問がつたはつたことは、わが國の學問の、盛んになるものになつたのです。文學や法律などに關するものから、醫學や農學に關する學問まで、あらゆる方面にわたつてゐました。

多くの外國の學者がきて、大學で教へましたので、わが國の學問もだんだん發達しました。また國學や漢學は、一時おとろへてゐましたが、これも新しく研究されるやうになりました。

佛教や神道のはかに、クリスト教も盛んになりました。

佐賀の乱や、西南の役などがおこりました。ことに明治十年（西曆一八七七年）の西南の役は、一ばん大きなさわざでした。これがをさまつてから、國內もだんだんしづかになりました。

五箇條の御誓文の中に、廣く會議をおこして、多くの人人がよいと思ふやうなことをしなければならい^いと書いてあります。また智識を世界に求めよとも示されてゐます。世界の文明國では、憲法を定め、國會を開いて、國民が、政治にあづかるやうになつてゐます。そこで、わが國でも憲法をつくることになりました。

政府が憲法をつくらうとしてゐるとともに、國民のうちからも、板垣退助^{いたかき たいすけ}らがさきにたつて、民主的な憲法をつくり、國會を開かなければならいとの意見が盛んに出てきました。熱心のあまり、方方でさわざま^さでおこりました。

明治八年には、元老院、地方官會議がまうけられ、

た。おもにアメリカから宣教師がきて、その教へをするめ、教會堂なども方にできました。わが國の人のうちにも、熱心な人があらはれました。新島襄^{にいじま じやう}はその一人であります。

文明開化 新しい文化が發達するにつれて、人人の風俗もしせんに變つてきました。刀をさす風がなくなり、男は散髪^{さんぱつ}となり、また洋服をきるなど、世のはげしいうつり変りが見られます。新聞や雜誌が新しくでき、電燈やガス燈がついて、西洋館が建ちました。食べ物も、これまで食べなかつた牛肉が喜ばれ、西洋料理屋ができるやうになりました。これらの風俗をこの文明開化といつてゐました。

四 立憲の政治

憲法の制定 藩をやめてから、政府はどんどん新しい政治を進めて行きました。ところが、この政府のやり方に、不平をいだくものがありました。そのために

十一年には府縣會が開かれました。これらはみな國會を開くじゆんびになりました。十四年になつて、二十三年に、いよいよ國會を開くといふ勅諭^{しよく}が出ました。

憲法は、一ばん大せつな國のきまりで、國の成り立ちや、國民の權利・義務や、國會のことが定めてあります。わが國では、はじめてつくるのですから、そのしくみをきめることは、なかなかむづかしいことでした。政府は伊藤博文^{いとう ひろふみ}をヨーロッパにつかはして、憲法のことを研究させました。そして伊藤らの骨折りで、二十一年になつて草案ができました。そこで明治二十二年（西曆一八八九年）二月十一日、紀元節の日に、盛大な儀式を行つて、大日本帝國憲法と皇室^{てんくわ}典範^{てんぱん}が發布されました。

内閣制度と帝國議會 これよりさき、明治十八年（西曆一八八五年）には、内閣の制度ができました。太政大臣・左大臣・右大臣などをやめて、内閣総理大臣および外務・内務・大藏・陸軍・海軍・司法・文部。

農商務・逓信の諸大臣をおきました。この時伊藤博文が、はじめて内閣総理大臣に任せられました。憲法には、帝國議會のことが、くはしく定めてあります。そこで、これによつて、明治二十三年（西暦一八九〇年）、衆議院議員を選んで、その年の十一月に、第一回の帝國議會が開かれました。これから政府は、議會とともに政治をすることになりました。江戸時代までは武家の政治であり、明治ははじめは役人の政治でありましたが、これから立憲の政治となつたのであります。また憲法のほかに、民法や商法などの、多くの法律もできました。

三 なぜ、藩をやめなければならなかつたのですか。
四 つぎのことがらについて、知つてゐることをいつてもらなさい。

一世一元 四民平等 文明開化

五 農村が明治の代になつて、どう変つてきたかを、しらべてみませう。

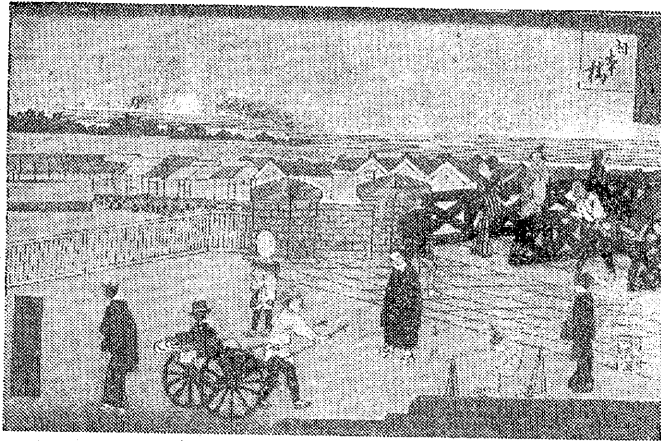
六 明治の代になつて、國民の生活では、どんなことが便利になりましたか。またどんな産業が盛んになりましたか。

七 政府や國民は、なぜ憲法や國會をつくらうとしたのですか。

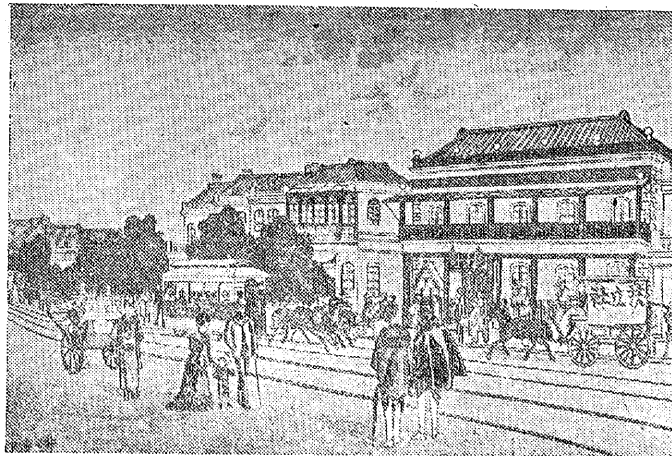
問題

一 五箇條の御誓文には、どんなことが示されてありますか。

二 都を京都から江戸にうつしたのは、なぜですか。



文明開化（一）



文明開化（二）

第十一世 界 と 日 本

一 明治の外交

世界の波は、あとからあとからおしよせてきます。わが國は、もはや昔のやうな離れ島ではなくなつて、世界の中の日本になりました。

清國と朝鮮、わが國が國を開くことになつてから、東洋と歐米との間からは、いよいよしたしくなりました。このころ清國や、わが國と條約を結んでゐたのは、アメリカ・イギリス・ロシア・フランス・ドイツなどの國國でありました。

外交を開くにあたつて、これをうまく進めて行くには、いろいろむづかしい問題がありました。まづ日本の國境をはつきりきめるために、諸外國と相談して、北は北海道と千島までとし、南は小笠原島と琉球まで

としました。

清國と朝鮮とは、遠い昔から交はりがありました。政府は歐米の各國と條約を結んだので、これらの國國とも條約を結んで、したしくしたいと思ひました。まづ朝鮮に使ひをつかはして、相談をはじめましたが、なかなかまとまりませんでした。

そのころ、政府の中に、朝鮮のことが、もとになつて、内治を、主とする意見と、外交を、とのへようといふ意見があつて、議論が二つに分れました。そのうち、内治を主とする意見が勝つて、西郷隆盛らが、役をやめるやうなさわぎがあつたので、長びきました。やうやく、明治九年になつて、條約を結びました。かうして、國交が改まり、貿易がはじまるやうになりました。

つぎに清國にも使ひを出して相談を重ね、明治四年

に條約を結びました。そのうち臺灣の問題で、日清兩國の間にいざごがございましたが、わが全權辦理大臣大久保利通が清國に渡つて、李鴻章と相談の結果、おだやかにおさまりました。

條約の改正 歐米の諸國とは、安政年間開國の時に、條約を結びましたが、そのうち、これを改める必要がございました。政府は明治四年に、岩倉具視らがアメリカに渡つた時から、その相談をはじめました。それから引きつづき相談を重ねましたが、いろいろめんどうなことがあつたので、なかなかまとまりませんでした。

條約を改めるには、まづ、國內をととのへ、法律をつくり、また國民の風俗を改めなければなりません。そこで政府は、相談を進めるかたはら、急いで法律をつくつたり、西洋風の風俗をとり入れたりしました。西洋風の夜會などが流行したのも、このころの

ことです。

このやうに政府は苦心に苦心を重ねた末、明治二十七年（西曆一八九四年）、外務大臣陸奥宗光の力で、まづイギリスとの相談に成功しました。そこでそのほかの國國とも、改正の相談が成り立つて、やうやくこのむづかしい仕事を成しとげました。この時の改正では、裁判上の事がだけが改まり、そのうち明治四十四年（西曆一九一一年）になつて、貿易上の事がらも改められ、條約の上で、わが國と歐米諸國とはすっかり平等になりました。

二 東洋のもつれ

日清戦役 明治十五年（西曆一八八二年）朝鮮の京城で、とつせんさわきがおこり、引きつづいて十七年にまたおこりました。

わが國は、伊藤博文らを天津につかはし、李鴻章と相談をさせて、朝鮮のためにいろいろ約束をしまし。

た。これを天津條約といひます。これではらく平和がたもたれました。

ところが明治二十七年になつて、朝鮮にまたも東學黨のさわぎがおこりました。そこでわが國と清國は、いろいろ相談をしましたが、つひに兩國の意見があはず、戦ひがはじまることになりました。

明治二十七年（西曆一八九四年）八月に、宣戰の詔書が下り、廣島に大本營がおかれしました。陸軍は朝鮮の平壤をおとし、海軍は黃海で清國の北洋艦隊をやぶりました。それから旅順・威海衛をおとし、遼東半島を占領しました。

そこで、清國は、二十八年、李鴻章をつかはして和をはかり、伊藤博文・陸奥宗光と、下關で講和の會議を開き、四月に、和議が成り立ちました。その結果、清國は、朝鮮の獨立をみとめること、臺灣・澎湖島及び遼東半島をわが國にゆづること、償金二億兩を出すことなどがきまりました。これが下關條約であります。

方ができるわけであります。わが國は喜んでこれに應じ、明治三十五年（西曆一九〇二年）一月に、同盟が成り立ちました。

日露戰役 北清事變が終つても、ロシアは、滿洲から、兵をひきあげません。清國は、ロシアと、いくたびも相談をしましたが、なかなかまとまりませんでした。

そのうへ、ロシアは、朝鮮の近くまで、手をのばすやうになつたので、わが國も、ロシアと話しあひを重ねました。しかし意見があはず、つひに、明治三十七年（西曆一九〇四年）二月、ロシアとの戦ひになりました。

わが陸軍は、朝鮮と遼東半島から上陸し、戰場は朝鮮から滿洲にうつり、遼陽・沙河で、はげしい戦ひがありました。旅順にはロシアが堅固な陣地をきづいてゐました。やうやくこれをおとし、三十八年三月には、奉天を占領しました。一方ロシアは、本國から

す。

ところが、この條約について、ロシア・フランス・ドイツの三國は、日本が遼東半島を持つことは、東洋永遠の平和のためによくないから、清國にかへすやうにといつてきました。政府はいろいろ相談をした上で、このすすめに従ふことになりました。

明治三十三年は、西曆千九百年にあたります。十九世紀を遡つて、二十世紀を迎へるのであります。

日清戰役によつて、東洋のありさまは、しだいに變つてきました。このころには各國が東洋に集つてきてゐましたので、外交上こみ入つたもつれが、だんだんおこつてきました。この年、北京（今の北平）で北清事變がおこりましたが、これは各國の兵が力を合せてしづめました。

日英同盟 このころに、日本とイギリスとが同盟しようといふ相談が持ちあがりました。この同盟はイギリスにもつがふがよいし、わが國にとつては力強い味方です。

六月に、アメリカの大統領ルーズベルトは、世界平和のために、兩國の間に立つて講和をすすめました。八月にはアメリカのボーッマスで、講和會議が開かれ、日本から小村壽太郎・高平小五郎らをつかはし、ロシアからはウキッテ・ローゼンらがきて、講和條約が結ばれました。

その結果、ロシアと日本は、滿洲から、兵をひきあげ、ロシアは、長春・旅順間の鐵道、關東州の租借権、および樺太の南半分を、日本にゆづることになりました。また清國が、滿洲の發展をはかるとき、兩國とも、それに口出しをしないことになりました。

かうして、長い間さわがしかつた東洋も、この戦争によつて、やうやく平和にむかふやうになりました。やがて、日本とロシアとの間には、日露協約が結ば

れ、ふたたびしたい間がらとなりました。また韓國（朝鮮）とは日韓協約を結び、そののち、さらに相談をした結果、明治四十三年（西曆一九一〇年）、わが國が韓國を併合しました。

三 産業の發達

資本と機械 わが國の産業は、昔から農業が中心でありました。明治の代となつてからも、やはり農業は、産業のうちでは、おもなものでありましたが、このほかに新しく紡績業・製糸業・織物業などの工業がおこつてきました。

織物を織るにも、昔は手織でありましたが、これを機械でつくるやうになつたのです。これらの新しい工業では、機械の力によつて、一時にたくさん品物をつくり出します。これには多くの人手や、もとでがかります。このもとでを資本といひます。これからは、この資本が中心になつて、經濟をすすめて行くのであります。

鐵道の發達 鐵道は、明治五年に、はじめて開通してから、年年各地にしかれて行きました。そのうちには、民間でできたものが多かつたのですが、これらを國のものにする意見がおこり、明治四十一年（西曆一九〇八年）に、今のやうに、大部分が官營となりました。かうした鐵道の發達は産業の上にも大そう役立ちました。

四 明治の文化

教育と學問 明治二十三年（西曆一八九〇年）十月、天皇は教育に関する勅語をお下しになりました。

明治のはじめごろは、盛んに、西洋の文化や、風俗をとり入れることがはりました。しかし、一方には、また、わが國の、昔のことを考へる風がおこつてきて、わが文學や歴史が、新しく研究されるやうになりました。

ます。

機械の力によつて世の中は大そう変りました。工業の發達は、國を富まし、文化を進めるもとで、わが國の産業は、この機械を用ひるやうになつて、目だつて發達しました。

工業は、日清戰役のうちに、ますます盛んになつて、清國や朝鮮へ製品を賣り出し、貿易もまた勢ひを得ました。

工業の發達につれて、製鉄所がたてられました。この鉄で、機械をつくり、さらに、汽船・機關車などをつくるやうになります。また、工場の動力に、電力が用ひられるなど、工業のしかけはますます大きくなりました。

工業の發達によつて、一方には、農業がしだいに、昔のやうな力を失ひ、工業が、經濟の中心をしめるやうになつてきました。このころから、財閥が、だんだんおこつて、わが國の經濟を、支配するやうになりました。

明治十九年（西曆一八八六年）に、帝國大學をはじめ、學校の制度がととのひました。國民は、すすんで學校に入るやうになつたので、生徒の数も年ごとにふえ、教育は一そう行きたるやうになりました。

學問は、明治のはじめごろにくらべると、一だんと發達しました。帝國大學のできたことも、研究をすすめる上に、大そうつがふがよかつたのです。これまでは、おもに西洋の學問を學んでゐましたが、だんだんわが國でも新しい研究が進み、いろいろの發明や発見があらはれるやうになりました。大森房吉の地震の研究や、北里柴三郎の結核やペストの研究が、有名であります。

そのほか、天文學・物理學・地質學・動物學・植物學などにも、すぐれた學者が出ました。

文學と美術 教育が進むにつれて、文學もまた盛んになり、小説・戯曲・和歌・俳句・新體詩など、それぞれの方面で、すぐれた人があらはれました、なかで

も尾崎紅葉・幸田露伴・坪内逍遙・森鷗外・落合直文・正岡子規・島崎藤村らが有名です。また外國の文學がいろいろ翻譯されて、わが國の文學の進歩に大そう役立ちました。

美術は、一時大そうおとろへてゐました。フェノロサや岡倉天心らが、わが國の美術のりつばなことを熱心にとなへたので、だんだん盛んになりました。そして狩野芳崖・橋本雅邦のやうなすぐれた人があらはれました。また西洋画では黒田清輝らが有名です。

三 機械の發明が、どれだけ世界の文化を進めたか、よく考へてみませう。

四 この時代にどんな工業が盛んになりましたか。

五 教育をひろめるために、政府はどんな工夫をしましたか。

六 わが國で、發明、發見されたものには、どんなものがあるかしらべてみませう。

七 つぎの人人は、どんなことをしたので有名ですか。

福澤諭吉 新島襄

北里柴三郎 坪内逍遙

問題

一 外交のことで、政府はどんな苦心をしましたか。

二 わが國の鐵道の發達についてしらべてみませう。

第十二大正から昭和へ

一 歐洲大戰と日本

明治四十五年(西曆一九一二年)七月、天皇は御病氣におなりになりました。國民は、みな早くおなほりになるやうにいのりしましたが、そのかひもなく、その月の三十日に、御年六十一歳でおかれになりました。明治天皇と申し上げます。皇太子嘉仁親王が位をおつぎになつて、年号が大正と改まりました。

歐洲大戰 このころから、世界のやうすは、だんだんむづかしくなつてきて、つひに歐洲大戰がおこりました。大正三年(西曆一九一四年)の六月、バルカン半島で、オーストリアの皇太子が、セルビアの一青年に殺されました。これからオーストリアとセルビアとの間に、戦ひがはじまり、それがひろがつて、ドイツ

はロシアに宣戦し、つづいてイギリス・フランスもドイツと戦ひをはじめました。そしてヨーロッパの諸國

は、ドイツとオーストリアを中心とする同盟國と、イギリス・フランス・ロシアなどの聯合國の、二つに分れることになりました。そのうち、アメリカ・イタリヤ・中華民国(明治四十五年、清國がほろびて中華民国がおこりました)も、聯合國に加はつたので、世界の大戦争となりました。わが國は、日英同盟にしたがつて、翌八月、ドイツにむかつて、宣戦を布告しました。

この大戰は、四年あまりつづいて、聯合軍の勝利で終りました。大正七年(西曆一九一八年)十一月、休戦となり、翌八年、フランスのバリーで講和會議が開かれ、わが國からは、西園寺公望・牧野伸顯らが、全權

委員としてつかはされました。アメリカの大統領ウィルソン、フランスの首相クレマンソーや、イギリスの首相ロイドジョージらが出席し、集まった國が二十八箇國におよぶ大きな會議でありました。この會議でできたのが、ベルサイユ條約であります。

わが國は、膠州灣、と山東省にあつたドイツのすべての權益をゆづりうけ、また赤道以北の旧ドイツ領の南洋諸島を治めることになりました。

歐洲大戰は、今までにない大きな戰爭で、そのために、敵も味方も、大そう損害を受けました。各國は、平和をのぞみ、できるだけ戰爭をさけたいと熱心に考へました。講和會議の目的も、この世界平和の建設にあつたので、ドイツをきびしくこらすことになつたのです。この時ウィルソンが、國際聯盟をつくることをはかり、各國が賛成して、わが國も、これに加はりました。

ワシントン會議 この大戰で、世界のやうすは、す

ができることを申しあはせ、また太平洋の島嶼では、各國がたがひに權利をみとめあひ、もしも問題がおこつた時には、たがひに相談をするやうに、約束ができました。これと同時に、日英同盟は十分その目的を達したので、やめることになりました。

二 太平洋戰爭

大正十五年（西曆一九二六年）十二月二十五日、天皇がおかれになり、今上天皇が位におつきになつて、年号が昭和と改まりました。

滿洲事變 歐洲大戰がすんでから、しばらく平和がつづいてゐましたが、このころから、わが國內のありさまが、だんだん變つて來ました。ことに軍部の力が政治や經濟の上にはびこつてきて、世間がさわがしくなり、五・一五事件や二・二六事件のやうな血なまぐさいことがつづきました。そしてとうとう滿洲のことから、中華民國との間にめんだうなもつれができ

つかり變りました。ことにロシア・ドイツ・イタリヤなどには大きな變化がありました。東洋も全く平和になつたわけではありません。世界平和のためには、各國がたがひに軍備を縮小するよりほかはないといふので、アメリカが主となつて、ワシントンで國際會議が開かれました。わが國もこれに加はりしました。大正十年（西曆一九二一年）のことです。

この會議の相談では、まづ海軍の縮小がきめられ、英・米・日の主力艦の割合を、五・五・三とし、また太平洋の島嶼の軍備を、この上ふやさないことに約束がされました。

ワシントン會議には、このほか極東問題・太平洋問題の相談もありました。歐米諸國は、政治上、貿易上、東洋に深い關係をもち、ことに支那の問題は、各國が大そう注意してゐます。わが國にとつても支那の問題は大せつです。そこで、この會議で、各國は中華民國の領土を重んじ、中華民國との間に、平等の貿易

で、東洋の平和がみだれることになりました。

昭和六年（西曆一九三一年）九月、滿洲の奉天の近くで、南滿洲鐵道が、ふいに、ばくはされました。それをきつかけに、滿洲にゐたわが軍が、奉天を攻めてこれを占領し、つづいて各地を攻撃しました。これが滿洲事變のおこりです。

中華民國は、この事變について、日本がさきに兵を動かしたことは、東洋の平和をみだすものであるから、すぐに日本の軍隊を引きあげてもらひたい、といつて、これを國際聯盟にうつたへ、そのかいけつをたのみました。

事變がおけると一しよに、日本の軍部によつて、奉天を中心に、新しい政府ができました。この政府は、もと清國の宣統帝であつた溥儀を執政にして、新しく滿洲國を建てました。わが國は、すぐにこれを獨立國として取りあつかひ、同盟を結びました。

一方、國際聯盟では、中華民國のうつたへをきい

て、まづこの事変の真相をよくしらべることになりました。その結果は、日本のやりかたは正しくない、満洲國も國際法のおきてにそむいてゐる、といふことでありました。聯盟がこの報告を聞き入れたので、それに不服であつたわが國は、とうとう聯盟からぬけてしまひました。

この間にわが軍はどんどん攻撃を進めて、北支まで攻め入りました。中華民國の軍もこれをふせぎましたが、北平の近くまでわが軍がきたので、戦ひを中止する相談がまとまりました。

支那事変 この満洲事変から六年たつたのちに、支那事変がおこりました。昭和十二年（西曆一九三七年）七月、北平の近くの蘆溝橋で、とつせん日支兩軍の間に戦ひがはじまりました。わが軍はすぐに兵を進めて北平を占領しました。それから青島・上海をおとし、中華民國の都南京をあらし、廣東・武昌・漢口などの重要なところを占領しました。蔣介石は重慶

一方、ヨーロッパのありさまを見ると、歐洲大戰のち、二十年の間に、大そうやうすが変りました。ことに、ドイツはヒットラーが總統になつて、ナチスの政府をはじめてゐます。軍備を盛んにして、ポーランドに攻め入り、つひに、英・佛兩國と戦ひをはじめました。

三國同盟 わが國とドイツとは、昭和十一年に同盟を結びましたが、十五年（西曆一九四〇年）九月には、イタリヤを加へて、日・獨・伊三國同盟ができました。そこで日・獨・伊の三國は、米・英や、ソ聯・中華民國と対立することになりました。わが國と米・英との間も大そうあふないことになりました。かうして東と西から、世界の全体が戦ひにまきこまれる勢ひになつてきました。

太平洋戦争 このころ、わが國では、平和をとへる人人が力を失ひ、政府は、戦争のために、國內をかためる必要から、政治・經濟・文化をすべてたてなほ

にうつつて、これを根據地としました。かうしてわが軍の攻撃はだんだんひろまつて、事変はつひに長期戦となりました。

支那事変がこのやうにひろがつてしまつたことは、日支兩國の間だけでなく、米・英をはじめとして、東洋と關係の深い國にとつてこまることがたくさんあります。時の政府も、はじめはこの事変をできるだけ早くまとめて、中華民國と仲よくして行きたいと、力をつくしましたが、戦ひはひろがつて、手がつけられないありさまでした。軍部がどんどん戦ひを進めたので、坂から石がころがるやうに、大へんな勢ひになつてしまひました。かうなつたので、政府も、この戦ひは、東亞の新秩序をつくるのが目的であると、國の内外に宣言しました。また、中華民國の政府を相手にしないともいひました。かうなると、中華民國の問題について、米・英とは明らかに意見がらがふことになりました。

して、舉國一致をはかる新体制をつくらうとしました。

また一方では、アメリカと、いろいろ相談をしましたが、この相談が、すすむにつれて、政府と軍部との意見があはなくなり、そのために昭和十六年（西曆一九四一年）十月、近衛文磨は内閣総理大臣をやめなければならなくなりました。そして陸軍大臣東條英機がこれに代りました。

かうしてアメリカとの相談もつひに行きづまつてしまひました。十二月八日の朝、わが國は、ハワイの真珠灣をとつせん攻撃してから、米・英兩國に宣戦を布告しました。

つづいてわが軍は、マレー半島やフィリピンに上陸し、香港をおとし、南太平洋方面をおさへました。翌十七年（西曆一九四二年）一月には、マニラをとり、シンガポールやラングーンを占領して、南洋の島島を手に入れ、さらに遠く歐洲にまで、攻撃を加へ

ました。

このころまで、わが軍はいきほひにまかせて、攻撃を進めてゐましたが、四、五月ごろから米・英聯合軍がもりかへてきました。珊瑚海や、ミッドウェー、ガダルカナルの海戦で、わが海軍は大きないたでをうけ、それ以上進むことができなくなりました。聯合軍は中部太平洋に進み、マーシャル群島・トラツク島を攻撃し、太平洋の島島がつぎつぎにその手にうつりました。それからサイパン島が占領され、マニラがとりかへされました。最後に硫黄島や沖縄が占領されたので、わが國は全く聯合軍のためにとりかこまれてしまいました。わが本土は昭和十九年（西暦一九四四年）の秋から空襲をうけ、東京・名古屋・大阪などの都市をはじめ、各地が大そう損害をうけました。聯合軍は最後に本土の上陸作戦を計画しましたので、わが國も、本土決戦の覺悟をきめました。

二十年（西暦一九四五年）の五月には、ヨーロッパをはじめ、いろいろの制度の改革や、また長い間、日本の經濟を支配してゐた財閥をこはして、經濟の民主化をはかり、また信仰を自由にしたりして、民主主義の國家をたててゐることをのぞんでゐます。

政府も國民も、この聯合軍司令部の占領の目的に、よく力をあはせて、平和な日本をきつき上げることにげんでゐます。

天皇は昭和二十一年（西暦一九四六年）の一月に、詔書をお下しになつて、日本國民のむかふべき道をおさとしになりました。そのうちには、まづ、明治天皇のお定めになつた五箇條の御誓文をおあげになつて、つぎのやうにおほせられてゐます。

須らく此ノ御趣旨ニ則リ、舊來ノ陋習ヲ去リ、民意ヲ暢達シ、官民輿ゲテ平和主義ニ徹シ、教養蠱カニ文化ヲ築キ、以テ民生ノ向上ヲ圖リ、新日本ヲ建設スベシ
また

の戦ひも、ドイツがやぶれて終りました。聯合軍は七月に、ポツダムで日本の處理案を定め、わが國に降服をすすめました。八月になつて廣島に原子爆弾がおとされ、またソ聯からも攻められるやうになつたので、天皇はポツダム宣言を受け入れるとの思召しで、八月十五日、大詔をお下しになつた上、さらに政府と大本營に降伏を命じ、また國民に武器をすてて、てむかひをやめるやうに命令をお出しになりました。

わが國はまげました。國民は長い間の戦争で大へんな苦しみをしました。軍部が國民をおさへて、無理な戦争をしたことが、このふしあはせをおこしたのであります。

マッカーサー元帥の下に、聯合軍はただちに日本を占領しました。この占領は、日本の秩序をたて、軍部を倒し、軍國主義の思想をすつかりのぞいて、國民に自由をあたへ、民主主義によつて、日本をたてなほすことがその目的であります。そのために、憲法の改正

朕は爾等國民ト共ニ在リ、常ニ利害ヲ同ジウシ、休戚ヲ分タント欲ス。朕ト爾等國民トノ間ノ紐帶ハ、終始相互ノ信頼ト敬愛トニ依リテ結バレ、單ナル神話ト傳說トニ依リ、生ゼルモノニ非ズ。天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本國民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノニ非ズ。

新しい政治がはじまりました。今度こそ、ほんたうに、國民が力をあはせて、日本を民主主義の國にするときであります。

問題

一 歐洲大戰ののち、世界の平和のために、どんな工夫がされましたか。

二 日清戦争から、今日までに、わが國と中華民國との間にどんなことがありましたか。

ポツダム宣言

五 聯合軍は、わが國のために、どんなことをしてゐますか。

六 歴史のべんきやうは、どんな風にしたらよいでせうか。わが國の歴史を、はじめからよく考へなほして、まとめてみませう。

政權の移りかはり

西紀
300年

おもな事がら

題目 朝鮮 支那 西洋

476	西ローマ帝國はるびる	晋	南北朝	羅	高麗	日本のはげばの	391	朝鮮に兵を遣ふる	地方の諸豪族	聖德太子 中大兄皇子 700年	500年	400年
871	英國王アルフレッド即位	五代	渤海	羅海	新羅	開けゆく日本	538	佛敎つたはる	藤原氏	600年	800年	900年
1066	第一回十字軍聖戦	宋	唐	五代	平安京の時代	平安京の時代	858	藤原氏攝政となる	藤原氏	1000年	1100年	1200年
1215	英國大憲章である	元	蒙古	宋	武家政治	鎌倉幕府	1167	平家源氏と源氏との戦い	平氏	1300年	1400年	1500年
1492	コロンブスのアメリカ発見				鎌倉から室町		1274	足利義満の足利幕府	足利幕府			
1517	ルターの宗教改革						1467	豊臣秀吉の豊臣幕府	豊臣幕府			

年表

政権の移りかはり

おもな事から

題目 朝鮮 支那 西洋

紀元	西紀	東紀	年	政権の移りかはり	おもな事から	題目	朝鮮	支那	西洋
300年							高麗	新羅	ローマ帝国はろびる
400年							高麗	新羅	
500年							高麗	新羅	
600年							高麗	新羅	
700年							高麗	新羅	
800年							高麗	新羅	
900年							高麗	新羅	
1000年							高麗	新羅	
1100年							高麗	新羅	
1200年							高麗	新羅	
1300年							高麗	新羅	
1400年							高麗	新羅	
1500年							高麗	新羅	
1600年							高麗	新羅	
1700年							高麗	新羅	
1800年							高麗	新羅	
1900年							高麗	新羅	

斜線のこいところは実権を示す
うすいところは幾分弱いことを示す

K250.32-1-a

くにあゆみ 中学校第二・三学年用

Approved by Ministry of Education (Date Nov. 17, 1949)

昭和24年11月10日 翻刻発行
昭和25年1月20日 修正印刷
昭和25年2月25日 修正発行
昭和25年2月25日 文部省検査済

中社 807

著 作 者 文 部 省
発 行 者 東京都文京区久野町108番地
日本書籍株式会社
代表者 木村 潤之助
印 刷 者 東京都文京区久野町168番地
日本書籍株式会社
代表者 木村 潤之助

発 行 所 東京都文京区
久野町108 日本書籍株式会社

¥ 10.30

